

第四章 発掘調査

二 発掘調査の経過と方法

第一節 発掘調査の経緯・経過・方法

一 発掘調査に至る経緯

経緯 水戸八幡宮は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「茨城高等学校遺跡」（水戸市遺跡番号六二）に該当している。今般の保存修復工事は、拝殿及び幣殿を約一mジャッキアップした後に礎石を一度取り払い、基礎を最大五〇cm根切りしてコンクリートを打ち、礎石を据え直す基礎工事が伴うことから、地下への影響が避けられない状況であった。本来であれば地下構造の現状保存が望ましいところであったが、拝殿及び幣殿を恒久的に保護するためには基礎強化が避けられなかつた。そのため協議の結果、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなつた。

発掘調査の実施主体については、調査対象の学術的価値が特に高く、かつ技術的に困難なものであることから、関係機関との協議の結果、水戸市教育委員会による記録保存を目的とする発掘調査を実施することになつた。

今般の発掘調査名称は「茨城高等学校遺跡第一地点・第三次発掘調査」である。平成二年八月二六日には、文化財保護法第九十九条第一項に基づく規定により、茨城県教育委員会教育長あて、発掘調査の着手を報告した（教文第七三七七号）。既往の調査 なお今調査に先づ調査のうち、第一次調査とは、平成八年九月二日から同月二二日にかけて実施した八幡宮本殿の保存修復に伴う発掘調査であり（井上一九九九）、第二次調査とは、平成二年三月一六日に実施した、八幡宮仮拝殿設置に伴う試掘調査である（水戸市教育委員会二〇一）。



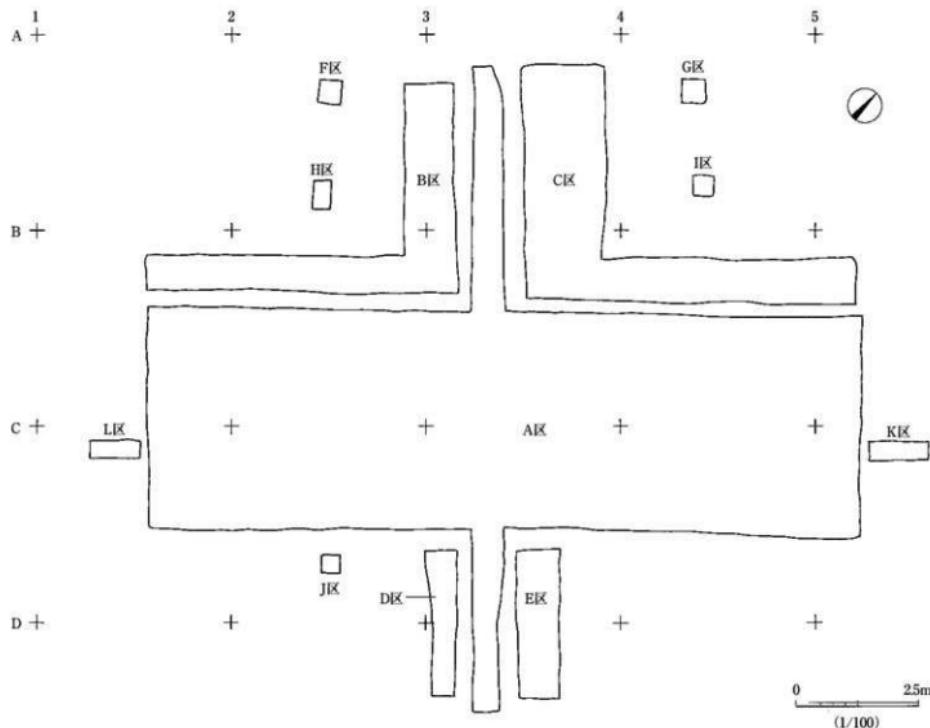
131 発掘調査風景

調査区上に建屋があるため、雨天でも調査を続行できるという利点はあるが、揚屋の高さが一m程度と低く、柱筋直下の遺構調査では常に前屈みの姿勢を余儀なくされた。特に写真撮影は支障が生じ、全景写真は撮ることができなかつた。また個別の遺構であつても、場所や天候によつて自然光による撮影は不可能な場合があり、やむを得ず投光器を照らして撮影に臨んだ。

調査方法 今般の基礎工事は、現行拝殿及び幣殿をジャッキアップする、いわゆる揚屋工法で実施された。従つて発掘もジャッキアップされた拝殿及び幣殿の直下での調査を余儀なくされた（一三一）。調査区はA区～K区まで一区を設定した（一三二）。本来ならば建物直下の全域に調査区を設定すべきであるが、ジャッキアップされた拝殿及び幣殿を支える土台の周囲は安全上、調査区から外すとともに、調査区の一部（B～E区）は地山である関東ロームまで掘り下げるとは避け、途中の遺構確認面であるIII層上面までの調査とした。また、F～J区はIII層上面で検出された前拝殿（三号遺構）の範囲を確認するための追加トレンチで、III層上面のプラン確認までに留めている。L～K区は拝殿縁石の外側に設置し、拝殿を貫く土層断面を観察するために設置したもので、関東ローム層まで削削した。

調査経過 発掘調査は平成二年八月二六日から平二一年一〇月一四日にかけ

て実施した（実働二九日間）。



132 発掘調査区

もの。

第二節 基本層序 (二三六・表三)

今次調査では、地山である関東口一ム層を含め、4層の基本層序が確認された。各層はさらに細分することができ、最大で一七層に及ぶ。各層の覆土は表三を参照さ

員会事務局文化課文化財主事)が担当した。色川順子・金子千秋(同課嘱託員)、岡見知紀(東京学芸大学大学院生)がこれを補佐し、石崎寿子・榎沢由紀江・海老原四郎・岡野政雄・栗原芳子・黒須秀昭・富田仁・広水一真・福原雅美・渡辺恵子が参加した。整理作業・報告書執筆は関口が担当し、色川・田中恭子・齊藤千佐乃・人見よね子・平根真由美・深澤貢子が参加した(所属は当時のもの)。

掘削はすべて人力で行い、遺物包含層および遺構の確認・調査を実施した。遺構計測等は通り方測量で、二〇分の一を基本とした。

れたい。以下、基本層序の特徴を示す。

I層 現行拌殿を構築する盛土層である。層厚は5cm程度と薄い。現行拌殿の礎石はⅢ層上にそのまま置き、その周りを盛土・整地してI層を構築している。

I層は現行拌殿礎石の側石（2列～8列、1列～1列）より外側には堆積していないことから、現行拌殿の基壇構築に伴う盛土・整地層であることは明かである。構築年代は現行拌殿が建設された安永四（一七七五）年に比定される。

II層 ローム層主体の整地層で、覆土の違いからⅡa層～Ⅱb層に細分される。層厚はおおむね5cm程度である。II層はロームによる整地であるから明確に判別できる。II層は調査区全面に整地されず、部分的に認められる。土層断面の観察では、Ⅲ層上面の遺構をパックしている状況が確認されるとともに、II層上面から掘り込まれている形跡はなかった。したがってII層は生活面としては認識できず、I層と同じ由来の盛土・整地層と判断した。構築年代はI層同様、現行拌殿が建設された安永四（一七七五）年に比定される。

III層 本地区で最も厚い整地層である。覆土の違いからⅢa層～Ⅲc層に細分される。層厚はおおむね30cmである。Ⅲ層上面からは二棟の拌殿跡が検出されており、切り合い関係から少なくとも三時期の変遷を窺うことができる。Ⅲ層の下層である関東ローム層（地山）からは拌殿に関連する遺構は認められないため、Ⅲ層は八幡宮がこの地に遷座してきた際の盛土・整地層と判断される。

構築年代は八幡宮がこの地に遷座した宝永六（一七〇九）年に、廃絶年代は第I・II層が構築された安永四（一七七五）年にそれぞれ比定される。

IV層 現行拌殿を取り囲む大谷石製の縁石の外に設定した、K区・L区のみで認められる盛土層である。覆土の違いからIVa～IVb層に細分される。IV層は現行拌殿の基礎設置に伴う土層をパックしており、IV層中から現代の遺物が出土地であることから、現代に大谷石を縁石として敷設するに際し整地した層であると思われる。拌殿直下のI～III層とは由来が異なり、拌殿周辺の土地利用に保

るものである。構築年代は現代に比定される。

関東ローム層 地山層。

多数の遺構が検出されている。これらの遺構群

はI層～III層上面で確

認された遺構群とは軸線

が異なっているものがあ

り、八幡宮遷座以前の土

地利用を示しているもの

と考えられる。廃絶年代

は八幡宮が遷座した宝永

六（一七〇九）年である。

なお遺物注記ではV層と

表記している。

表3 基本層序

I層	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 多量、雜 ($\phi \sim 30\text{mm}$) やや多、炭化物微量雜 ($\phi \sim 30\text{mm}$) やや多量含む粘性弱、締まり強。
II a層	褐色土層 (10YR4/4)。ローム粒 ($\phi \sim 40\text{mm}$) 主体。粘性弱、締まり強。
II b層	明褐色土層 (10YR6/6)。ローム粒 ($\phi \sim 30\text{mm}$) 主体。白色粒子少量、雜多量含む。粘性弱、締まり強。
III a層	黒褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) やや多量、白色粘土少量含む。粘性弱、締まり強。
III b層	黒褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 多量含む。粘性弱、締まりやや強。
III c層	灰黃褐色土 (10YR4/2) と灰黃色土 (2.5Y6/2) の混合層。ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 微量、白色粘土少量含む。粘性弱、締まり強。
III d層	灰黃褐色土 (2.5Y6/2)。ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 少量、小石 ($\phi \sim 15\text{mm}$) 少量含む。粘性強弱、締まり強。
III e層	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。ローム粒 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 少量、炭化物微量、白色粘土微量含む。粘性弱、締まり極めて強。
III f層	暗褐色土層 (10YR3/3)。ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) やや多量、炭化物 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 少量、粘土少量含む。粘性弱、締まり強。
III g層	暗褐色土層 (10YR3/3)。ローム粒 ($\phi \sim 5\text{mm}$) やや多量、ロームブロック多量、炭化物 ($\phi \sim 3\text{mm}$) 少量、小石 ($\phi \sim 30\text{mm}$) 微量含む。粘性弱、締まり強。
III h層	暗褐色土層 (10YR3/3)。ローム粒 ($\phi \sim 5\text{mm}$) やや多量含む。粘性弱、締まり強。
III i層	暗褐色土層 (10YR3/3)。ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 多量、炭化物 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 少量、粘土少量含む。粘性弱、締まりやや強。
III j層	黒褐色土層 (10YR3/2)。ローム粒 ($\phi \sim 5\text{mm}$) やや多量、炭化物 ($\phi \sim 3\text{mm}$) 少量含む。粘性弱、締まり強。
III k層	黒褐色土層 (10YR3/2)。ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 多量、炭化物 ($\phi \sim 3\text{mm}$) 粘土少量含む。粘性やや弱、締まり強。
III l層	黒褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 3\text{mm}$) やや多量、炭化物 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 少量、粘土少量含む。粘性弱、締まり強。
IV a層	黒褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) やや多量、雜多量含む。粘性中、締まりやや強。
IV b層	黄褐色粘土層 (10YR6/8)。黒褐色土少量含む。ローム主体、粘性中、締まりやや強。

第三節 発見された遺構

一 遺構確認面

前筋において述べた基本層序の所見を踏まえ、今次調査では次に述べる三面の遺構確認面を設定した。

I層上面（一三三・一三五） I層は現行拌殿直下の基壇構築層である。本殿は少なくとも安永四（一七七五）年以降に、拌殿が建てられた後のものであり、表土層はなく、現地表面に積もった塵をハケ等で払ったところが、遺構確認面



133 I層上面 全景 西から



134 III層上面 全景 東から



135 ローム層上面 全景 東から

となつた。I層上面で確認されたのは、現行拌殿及び弊殿の礎石・基壇・礎石直下の布掘地形跡（一号遺構）、現代廢棄土坑（二号遺構）そして撒錢と思われる約四〇〇点に及ぶ銭貨である。

III層上面（一三四・一三七） III層は宝永六（一七〇九）年の八幡宮遷座に伴う盛土・整地層である。四基の遺構と四八基のビットが検出された。
ローム層上面（一三五・一三八） ローム層上面は宝永六（一七〇九）年の八幡宮遷座以前の生活面である。一二二基の遺構と五六基のビットが検出された。

一一 遺構各説

今次調査では、I層上面・III層上面・ローム層上面の三面にわたる遺構確認面から、二八基の遺構と一〇四基のピットが確認された。以下、各遺構ごとにその調査結果を記す。なお、今回の調査では六時期の変遷を設定することがで照されたい。

一号遺構（一三六）

位置・重複関係等 本遺構はA-C-1-5、D2-4グリッドに位置する。確認面はI層上面である。一号遺構より古く、他遺構より新しい。

形態 現行拌殿及び弊殿に係る地下遺構すなわち礎石・基壇（包含層I層）・礎石直下に認められる布掘地形を総称して「一号遺構」と名付けた。布掘地形の平面形は拌殿・弊殿プランと同様、東西軸を長軸とする長方形の北辺に正方形の張出が付く形状を呈する。規模は東西一二・九口×南北一〇・四口。堀幅は約一・一m。確認面からの深さは九〇cmを測る。主軸方位はN-四一度-W。

遺物 一四八表五七。一・三点が出土している。内訳は繩文時代点（破片二点・個体〇点）、奈良・平安時代一点（破片一点・個体〇点）、近世四点（破片四〇点・個体一点・近・現代二点（破片二点・個体〇点）、年代不明五七点（破片五六点・個体一点）である。

時期 第Ⅳ期（一七七五年～現代）

遺構の性格 現行拌殿及び弊殿に係る地下遺構である。①礎石・②基壇・③布

掘地形の三つに大別されるため、各区別毎に所見を記す。

①礎石 大小ちょうど一〇〇個体が認められた（縁石を除く）。ただしこれは発掘調査着手時点の数量であり、拌殿及び弊殿のジャッキアップ等の工程で移

動された礎石はカウント外である。これらの礎石は番付が付されているもの（第三章参照）と付されていないものがあるが、今次調査ではどちらも全て記録の対象とした。石材は大谷石（凝灰岩・花崗岩・安山岩に大別される。拌殿礎石の側石・番付で言うところの2列（西側）・8列（東側）・へ列（北側）は列・列（南側）等、参拝者の目につくところは花崗岩が用いられ、人目につかない内側は安山岩が、東石・縁石には大谷石が用いられている。花崗岩と安山岩は現行拌殿が建設された安永四（一七七五）年当時のものと考えられるが、大谷石はその後の補修によるものであろう。

②基壇 包含層I層自体がそのまま一号遺構の基壇に該当する。層厚は約五cmと薄い。縮まりは強い部分と中程度の部分がある。一定の搞き固めはしているものと思われるが、版築等の入念な地形は認められなかつた。また、断面構造をみると、礎石には個別の掘形は見受けられることから、III層上面に礎石を据え、そこにI層を敷き詰めて基壇となしたと考えられる。しかし僅か五〇cmの層厚であるため、礎石面を一段高めて「壇」とする視覚的効果はほほないと言つてよい。したがつて、果たしてこの高まりを基壇として認識してよいのかどうかは慎重でありたい。本報告ではこの高まりを指す名称として、ひとまずは一般的に理解しやすい「基壇」の名称を使用するものの、実態としては礎石の据付に伴う盛土と認識したほうがよいのかも知れない。

③布掘地形 幅一・一m、深さ九〇cmの規模を有し、断面形は上に開き気味のU字状を呈する。覆土には礫が充填され、堅固な基礎地形となつている。覆土は一層で、版築のような造作はみられないが、縮まりの程度はツルハシでもなかなか掘削できないほど強固であった。基礎地形として申し分なく、覆土の礫は入念に掲き固めながら充填されたと思われる。

なお、拌殿に接する本殿の発掘調査では布掘地形は認められていないが、基壇表面は「岩石にも等しくらい堅固な地盤であった」という（井上

一九九九）。今次調査における布掘地形も岩石に等しいほどの堅固さであり、本殿ではそれが基壇全面で認められ、拝殿及び弊殿では布掘地形という形で認められたということになる。ただし、本殿の堅固な地形はあくまでも基壇表面で、しかも礎石周辺に限られる。建造物の基礎工事としては拝殿及び弊殿のはうが入念と言えるかもしれない。神社建築の性格からすれば、本殿に主体があることから、本殿よりも拝殿のはうに入念な造作を施す理由はない。だが建築技術の進歩という観点からすれば、本殿は宝永六（一七〇九）年、拝殿及び弊殿は安永四（一七七五）年の建設とみられることから、後代の所産である拝殿及び弊殿のはうに、より入念な基礎工事が施されたというは不自然ではない。

二号遺構（一三七）

位置・重複関係等 本遺構はB2区に位置する。確認面はⅢ層上面である。一号遺構より新しい。今次調査で最も新しい遺構である。

形態 平面形は方形を呈する。西側は調査区外に延びる。規模は現況で長軸一四四cm×短軸一〇六cm、確認面からの深さは五〇cmを測る。主軸方位はN一四三度Wである。

遺物 一四八、表五、七。二〇点が出土している（一号遺構+二号遺構の一括遺物五点を含む）。内訳は近世五点（破片五点・個体〇点）、近現代一五点（破片一三点・個体二点）である。

時期 第VII期。出土遺物からみて現代。

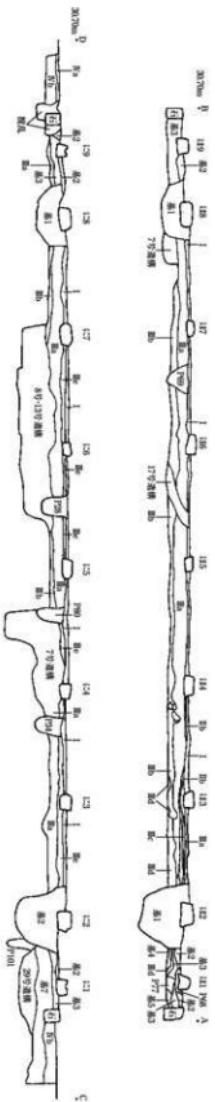
遺構の性格 廃棄土坑か。

三号遺構（一三七・一五六）

位置・重複関係等 本遺構はA2-C4区に位置する。確認面はⅢ層上面である。一号遺構（布掘地形）及び四号遺構に切られる。

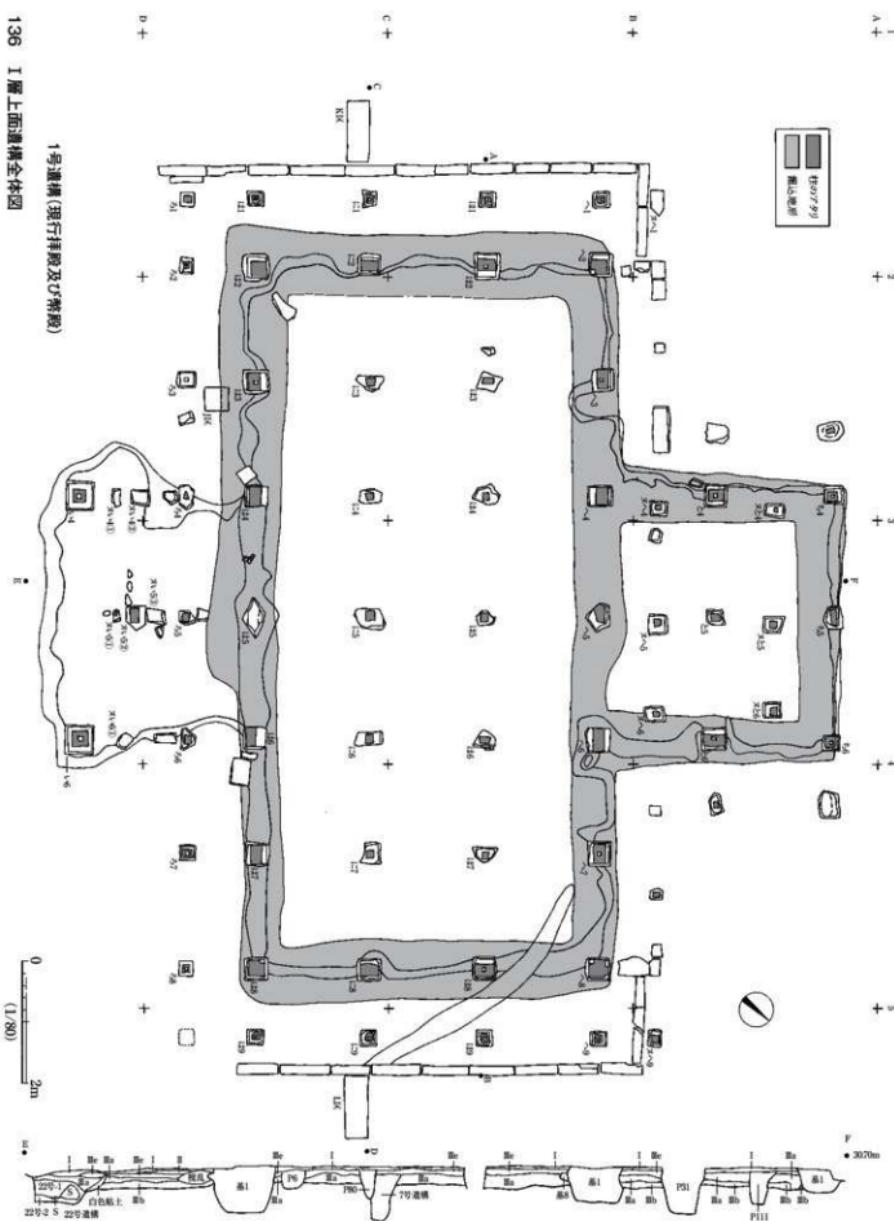
形態 柄行四間（七・六m）×梁行三間（五・七m）の礎石建物跡である。一間の寸法は柄行・梁行ともに一・九mを測る。ただし検出された遺構は礎石ではなく、礎石を掘った掘形である。礎石は現行拝殿構築の際に撤去されたとみられるため、正確な間尺は不明である。

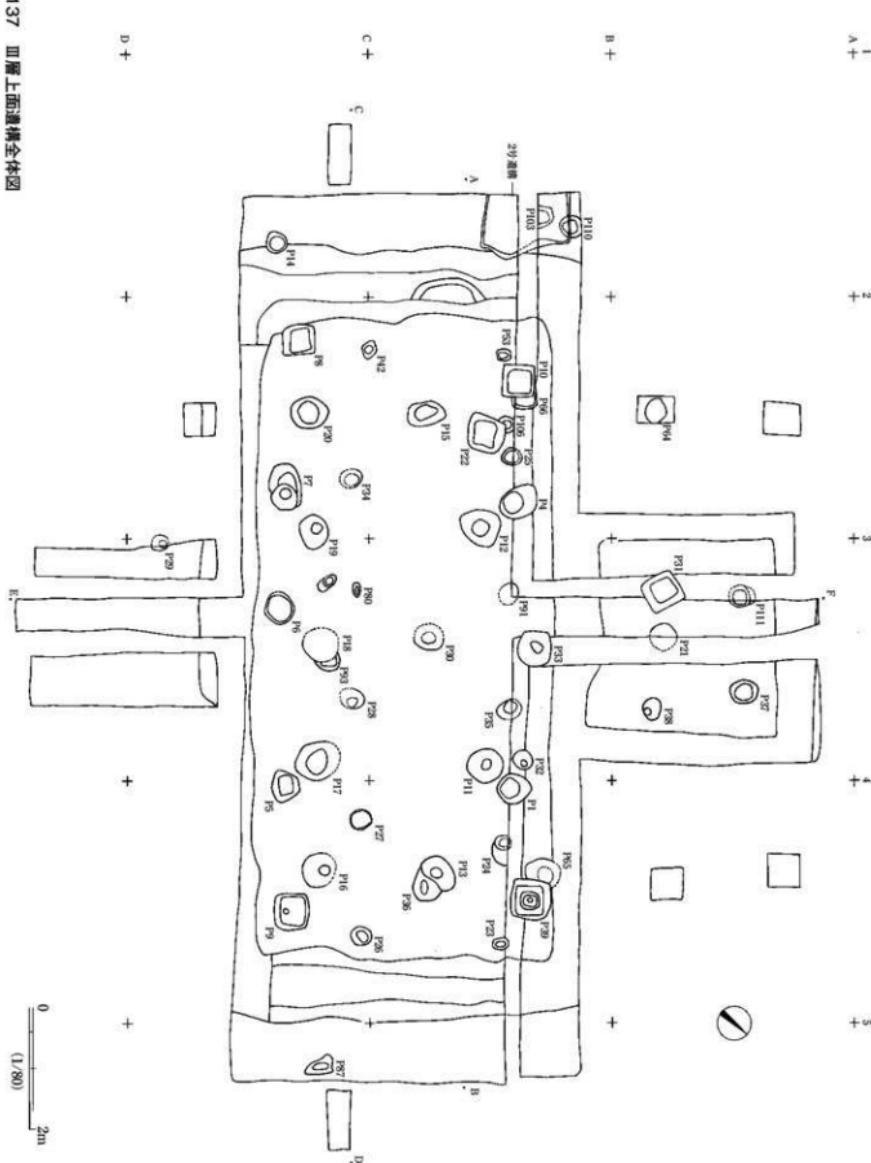
礎石掘形は一五基が検出されている。P一一、P一二、P一三、P一五、P一六、P一七、P一八、P一九、P二〇、P二一、P三〇、P三三、P六四、P六五、P六六で構成される。P一一一九、P一一一七の間隔は一間半。



第4章 1号・2号・3号 tumulus の構造図

1号遺構(現行洋綱及び発掘)





平面形は円形もしくは梢円形で、断面形はいずれも浅いレンズ状を呈する。掘形覆土は暗褐色土と砾の混合層で強固に焼き固めて地形とし、その上に礫石を据えていたのである。主軸方位はN—四三度—Wである。

遺物 第一四八、表五・七・九点が出土している。内訳は奈良平安時代一点（破片一点・個体〇点）、近世五点（破片四点・個体一点）、年代不明三点（破片二点・個体〇点）である。

時期 第IV期（一七四〇年頃—一七七五年）。

遺構の性格 磐石建物跡。現行拌殿の一代前の拌殿と思われる。

位置・重複関係等

本遺構はA3・B2・C4区に位置する。確認面はⅢ層上面である。

形態

P八、P九、P一〇、P三一、P三九の五基のビットで構成される。各

ビットはいずれも平面形は正方形、断面形は箱形である。床面にはカワラケが正位で置かれているのが最大の特徴である。

いずれも柱痕が明瞭に認められる。柱痕はすべて腐つて残っていないが、その部分が空洞となっているビットも見受けられ、保存状態は極めて良好であった。抜き取り痕はなく、柱がそのまま腐食したものと思われる。柱の形状は断面正方形であり、一边は約一五cmを測る。

四号遺構

本遺構は現況で五角形を呈する。調査区外（南側）にプランが伸びている可能性も否定できないが、五号遺構を取り囲むように配置されているのが特徴である。五号遺構・六号遺構ともに共通する埋納遺物（アワビ）が出土していることを含め、両遺構は一体的な正確を有するものと考えられる。

ビット間の間尺は三、八口（五、六口まで幅広く、バラツキがある。遺物 一四八、表五・七・三点が出土している。内訳は近世二点（破片一二点・

個体〇点）、年代不明一点（破片一点・個体〇点）である。

全ビットの底面から、カワラケが正位で一枚ずつ出土した。埋納遺物であることは間違いない。すべて完形で、かつ土厚等によつて押しつぶされていない。

内容物等の痕跡は全くなかった。さらにP一〇の上層からはアワビが逆位で出土した。これも完形であり、埋納に伴う遺物と思われる。

時期 第V期（一七七五年）。

遺構の性格 第IV基の拌殿（三号遺構）を廢絶し、現行拌殿（一号遺構）を普請する際の祭祀遺構。断面で柱痕が認められるものの、五角形プランや不規則な間尺からみて、建物が建っていたとは考えにくい。また、建造物を支える柱であるならば、底面に埋納されたカワラケは確実に土厚で潰れているはずであるが、そういった破損はみられなかった。したがって四号遺構に建てられた柱は単独の柱とみてよく、その性格としては、恐らく四号遺構を取り巻く五本の柱を神木とみなし、結界を張ったものと考えられる。

五号遺構（一三七・一五六）

位置・重複関係等 本遺構はB2・C4区に位置する。確認面はⅢ層上面である。重複関係はない。

形態

P一、P四、P五、P七の四基のビットで構成される。各ビットはいずれも平面形は円形または梢円形、断面形は箱形であるが、微妙な形状のバラツキがあり、四号遺構に比べて掘形の統一感は薄い。

いずれも柱痕が明瞭に認められ、その部分が空洞となっているほど保存状態は良好であった。抜き取り痕はなく、柱がそのまま腐食したものと思われる。柱の形状は断面円形であり、一边は約一五cmを測る。四号遺構が方形であるのと対照的である。主軸方位はN—四一度—Wである。

五号遺構全体のプランは東西一間（四九口）、南北一間（二九口）で、

東西方向（平行か）に1m程長い長方形を呈する。ただし調査区外（南側）にプランが伸びている可能性も否定できない。

遺物 一四八表五・七。二一点が出土している。内訳は奈良・平安時代九点（破片九点・個体〇点）、近世七点（破片六点・個体一点）、年代不明五点（破片五点・個体〇点）である。

P四最上層からアワビが正位で検出されているのが注目される。

時期 第V期（一七七五年）。

遺構の性格 第IV基の拝殿（三号遺構）を廃絶し、現行拝殿（一号遺構）を普請する際の神事のために建てられた祭壇遺構と思われる。

六号遺構（一三七・一五六）

位置・重複関係等 本遺構はA2-C4区に位置する。確認面はIII層上面である。重複関係はない。

形態 桁行五間（九・九m）×梁行二間（五・九m）の掘立柱建物跡である。一間の寸法は桁行が一・九八mを測るのに対し、梁行が二・九五mと長い。

現況では一三基のピットが検出されている。P一二三、P一二四、P二六、P二七、P二八、P三四、P三五、P三八、P四二、P五三、P八〇、P九〇で構成される。調査区外（北側もしくは南側）に伸びている可能性も否定できない。

各ピットの平面形は直径30cm程度の小降りな円形で、断面形はいずれも箱形、深さは30cm程度のものが多いが、規格は一定ではない。覆土は小石を多く含むものが多いが、さしたる共通性はない。いずれも柱痕ではなく、抜き取られて廃絶されたものとみてよい。ピット底部にはアタリのようは痕跡は見受けられなかつた。

主軸方位はN-四一度-Wである。

遺物 表七。一三点が出土している。内訳は奈良・平安時代六点（破片六点・

個体〇点）、近世五点（破片五点・個体〇点）、年代不明二点（破片二点・個体〇点）である。

時期 第III期（一七〇九年～一七四〇年頃）。

遺構の性格 据立柱建物跡。現行拝殿の二代前の拝殿と思われる。

七号遺構（一三九）

位置・重複関係等 本遺構はB3-C5区に位置する。確認面はローム層上面。ローム層上面で最も新しい遺構である。八号遺構・三号遺構、三〇号遺構・三一号遺構を切る。P九二とも切り合が、位置関係から一体のものの可能性がある。

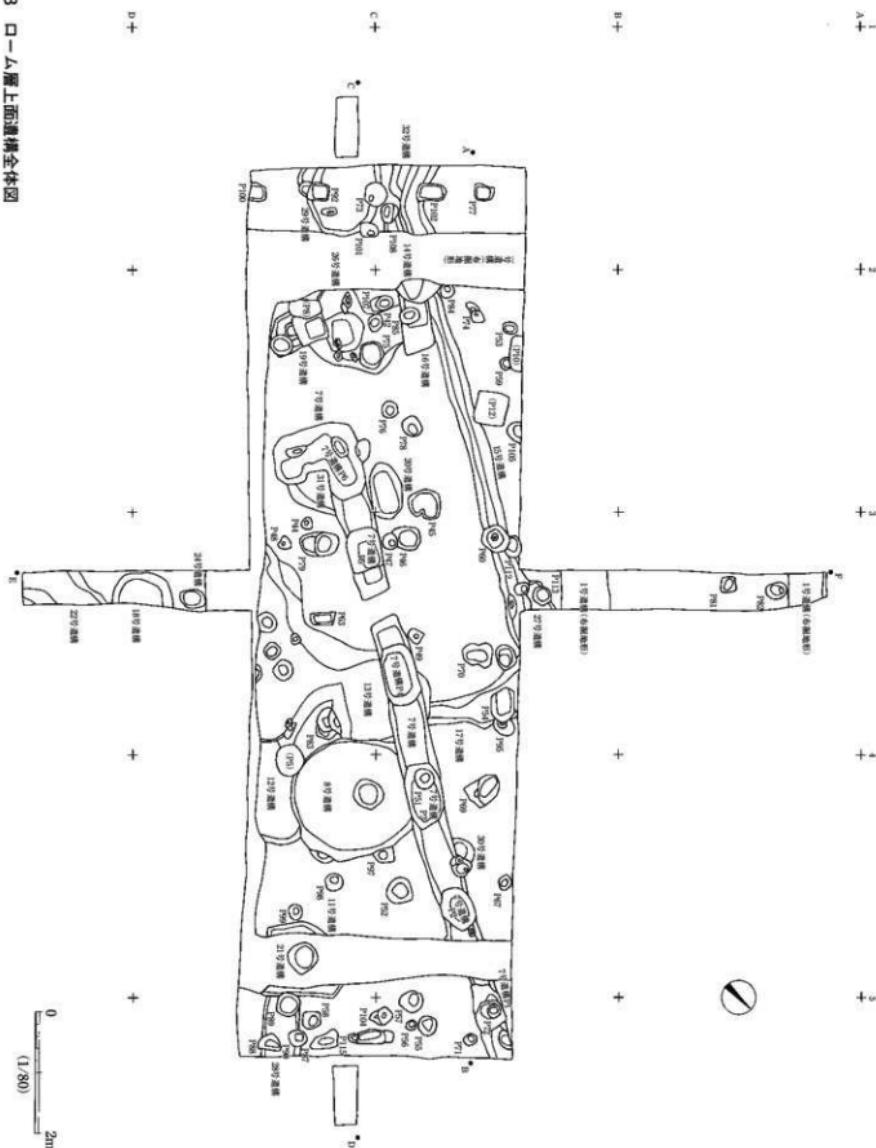
形態 布掘状遺構。規模は現況で長軸一一日、堀幅は一一日。確認面からの深さは20cmを測る。東側は調査区外に延びている。主軸方位はN-三三度-Eである。C3グリッド杭より約1m西側で南方に向直角に1m程度折れ曲がる。またC3グリッド杭より約1.5m東側で布掘が途切れ、40cmほどの空間（出入り口）が削出されている。

布掘には等間隔で一段低深く掘り込まれる。これを東側から、七号遺構-P1-P6まで枝番号を付した。各ピットには柱痕や柱のアタリが認められる。

遺物 一四八表五・七。五〇点が出土している。内訳は绳文時代三点（破片三点・個体〇点）、奈良・平安時代四〇点（破片四〇点・個体〇点）、近世六点（破片六点・個体〇点）、年代不明二点（破片二点・個体〇点）である。

時期 第II期（一七世紀後半～一七〇九年）。

遺構の性格 ピットと布掘という構成から、板塀跡と思われる。七号遺構-P6は約1mもの掘形を有するなど、相応に強固な区画施設である。当該時期は日蓮宗寺院三ヶ寺がこの地にあったことから、寺院伽藍の一区画を本遺構が担っていたものと考えられる。



八号遺構（一三九）

位置・重複関係等 本遺構はB2区に位置する。確認面はローム層上面。七号遺構より古い。一二号遺構・三号遺構・P九七とも切り合うが、新旧関係はなく、同時廃絶されている。

形態 平面形は円形を呈し、中央が若干くぼむ。規模は直径二m、確認面から約深さは五〇cmを測る。

遺物 一四八、表五七。二八点が出土している（一三号遺構との一括遺物二点を含む）。内訳は縄文時代一点（破片一点・個体〇点）、奈良・平安時代二二点（破片二三点・個体〇点）、近世四点（破片四点・個体〇点）である。

時期 第一期（一七世紀前半）。

遺構の性格 植栽痕。いわゆる中央掘り下げ形で、壁面や底面に根穴が認められないことから、抜き取り窓と考えられる。

九号・一〇号遺構 整理作業の過程で七号遺構に統合した。

一号遺構（一三九）

位置・重複関係等 本遺構はC4区に位置する。確認面はローム層上面。一号

遺構（布掘地形） に遺構中央を切られ、両側の遺構の肩が残る。

形態 平面形は方形もしくは台形状で、両肩部分の断面形はゆるやかな立ち上がりを呈する。規模は長軸一三二cm×短軸一二二cm、確認面からの深さは一〇cmを測る。主軸方位はN—I一度—IWである。

遺物 出土遺物なし。

時期 第一期（一七世紀前半）～第二期（一七世紀後半）～一七〇九年）。

遺構の性格 不明。

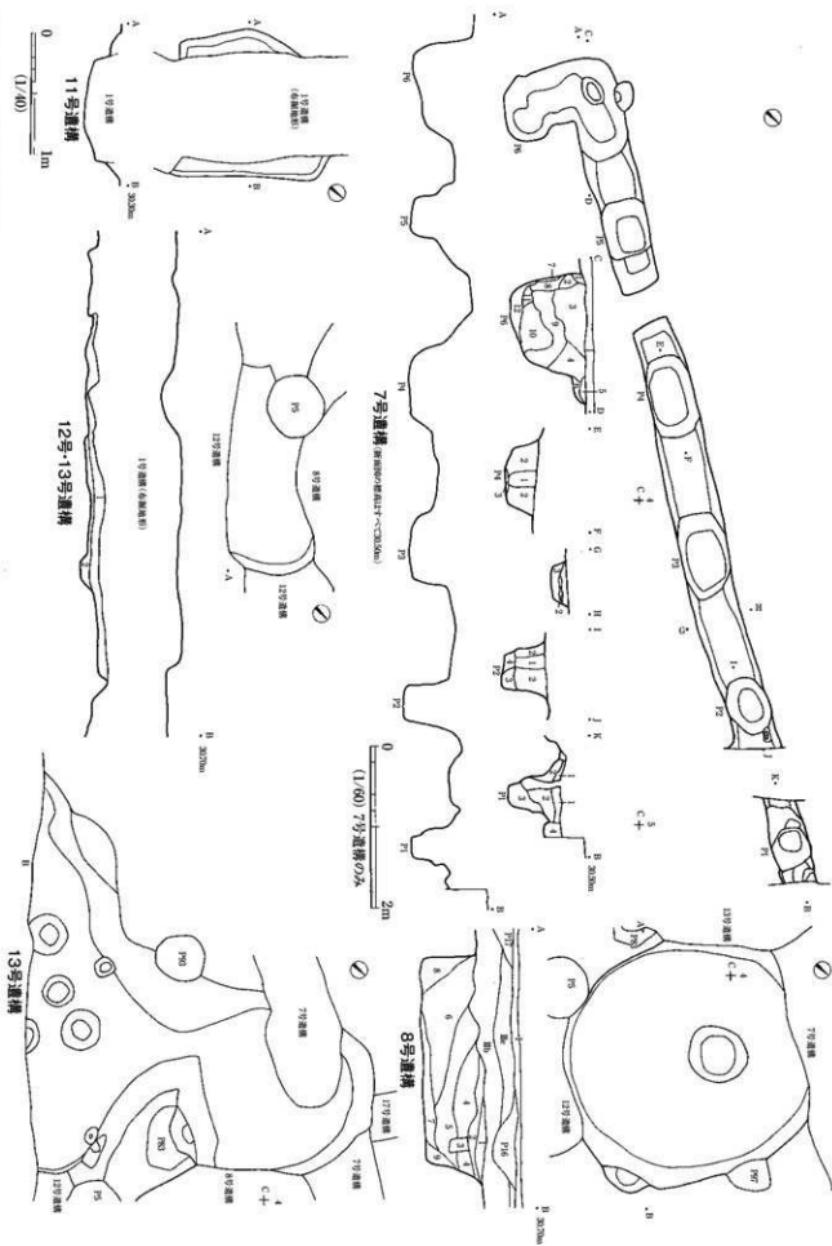
一二号遺構（一三九）

位置・重複関係等 本遺構はC3・4区に位置する。確認面はローム層上面。一号遺構（布掘地形）P五五に切られる。八号遺構・三号遺構とも切り合うが、新旧関係はなく、同時廃絶されている。

形態 東側部分のみ上端が残り、他はすべて他遺構と切り合ったため、平面形・

1号遺構～13号遺構 土層注記	
1号遺構	1 ロームと砂の混合層（10YR5/6）, ローム粒（d=20mm）主体、幾多含む。粘性弱、縮まり強。 2 にいに質白色土層（10YR4/2）, ローム粒（d=25）多量、白色粘土少含む。粘性弱、縮まり強。 3 黑褐色土層（10YR2/2）, ローム粒（d=15mm）少量含む。粘性弱、縮まりやや強。 4 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）微量含む。粘性弱、縮まりやや強。 5 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）中量含む。粘性弱、縮まりやや強。 6 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）多量、白色粘土少含む。粘性弱、縮まりやや強。 7 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）中量含む。白色粘土多量、微量含む。粘性弱、縮まりやや強。 8 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）やや多量、白色粘土多量、微量含む。粘性弱、縮まり強。 9 黑褐色土層（10YR2/2）, ローム粒（d=15mm）微量含む。粘性弱、縮まり強。 10 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）微量含む。粘性弱、縮まり強。 11 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）微量含む。粘性弱、縮まり強。 12 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）微量含む。粘性弱、縮まり強。
2号遺構	1 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=2mm）少量含む。粘性弱、縮まりやや強。 2 黑褐色土層（10YR2/4）, ローム粒（d=3mm）多量、ロームブロック多量含む。粘性弱やや弱。 3 黑褐色土層（10YR2/4）, ローム粒（d=3mm）中量、白色粘土少含む。粘性弱やや強。
3号遺構	1 黑褐色土層（10YR2/2）とロームの混合層、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 2 黑褐色土層（10YR2/2）, ローム粒（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 3 ローム粒主体、黒褐色土層（10YR2/2）, ローム粒（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 4 ローム粒主体、縮まりやや強。粘性やや弱。アリ。
4号遺構	1 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）少量含む。粘性弱、縮まり強。柱孔。 2 黑褐色土層（10YR2/2）, ローム粒（d=20mm）中量含む。粘性弱やや強。 3 黑褐色土層（10YR2/2）, ローム粒（d=20mm）多量含む。粘性弱やや強。
5号遺構	1 黑褐色土層（10YR2/2）とロームの混合層、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 2 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）少量含む。粘性弱やや強。 3 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）中量、ロームブロック少量、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 4 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）多量、ロームブロック多量含む。粘性弱やや強。 5 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=15mm）中量、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 6 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=2mm）少量、灰化物（d=2mm）微量含む。粘性弱やや強。 7 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）多量、ロームブロック中量、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 8 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）多量、ロームブロック中量、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 9 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）多量、ロームブロック少量、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 10 黑褐色土層（10YR2/4）, ローム粒（d=15mm）多量、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。 11 黑褐色土層（10YR2/4）, ローム粒（d=15mm）多量、灰化物（d=2mm）少量含む。粘性弱やや強。
6号遺構	1 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=2mm）やや多量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。 2 黑褐色土層（10YR2/2）, ローム粒（d=10mm）中量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。 3 黑褐色土層（10YR1/7, 7/1）, ローム粒（d=10mm）中量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。 4 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）多量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。 5 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）中量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。 6 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）多量、ロームブロック少量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。 7 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）多量、ロームブロック少量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。 8 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）多量、ロームブロック少量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。 9 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）中量、灰化物（d=5mm）少量含む。粘性弱やや強。
12号遺構	1 黑褐色土層（10YR2/3）, ローム粒（d=10mm）中量、白色粘土少含む。粘性弱やや強、縮まり強。
13号遺構	2 黑褐色土層（10YR2/2）, ローム粒（d=20mm）多量、白色粘土中含む。粘性弱やや強、縮まり強。

139 7号～13号遺構実測図



断面形は不詳。規模は現況で長軸一七〇cm×短軸径七〇cm、確認面からの深さは四三cmを測る。主軸方位はN-四三度±Eである。

遺物 一四九表五・七。六点が出土している。内訳は縄文時代一点(破片一点・個体〇点)、奈良・平安時代二点(破片二点・個体〇点)、近世七点(破片七点・個体〇点)、近・現代一点(破片一点・個体〇点)、年代不明五点(破片五点・個体〇点)である。

遺構の性格 周囲の同時廃棄遺構が植栽痕であることから、本遺構も植栽痕と考へるのが妥当と思われる。

時期 第Ⅰ期(一七世紀前半)。

遺構の性格 周囲の同時廃棄遺構が植栽痕であることから、本遺構も植栽痕と考へるのが妥当と思われる。

一三号遺構(一三九)

位置・重複関係等 本遺構はB-C3区に位置する。確認面はローム層上面。

一号遺構(布堀地形)・七号遺構より古く、P八三より新しい。八号遺構・一二号遺構とも切り合うが、新旧関係はなく、同時廃棄されている。

形態 平面形は北側は円形、南側はハの字状に開く、いびつな形状をしてい る。二・三の遺構が切り合っている可能性があるものの、平面・断面ともに分割することはできなかった。遺構南側底面は凹凸がみられる。規模は現況で長 軸三三〇cm×短軸二五九cm、確認面からの深さは五〇cmを測る。主軸方位はN-二七度±Wである。

遺物 一四九表五・七。三点が出土している。内訳は縄文時代一点(破片一点・個体〇点)、奈良・平安時代一点(破片一点・個体〇点)、近世一七点(破 片一七点・個体〇点)、年代不明四点(破片四点・個体〇点)である。

遺構の性格 周囲の同時廃棄遺構が植栽痕であることから、本遺構も植栽痕と考へるのが妥当と思われる。

考へるのが妥当と思われる。

一四号遺構(一四〇)

位置・重複関係等 本遺構はB2区に位置する。確認面はローム層上面。二号

遺構(布堀地形)に遺構西側を切られる。一五号遺構・一六号遺構より新しい。

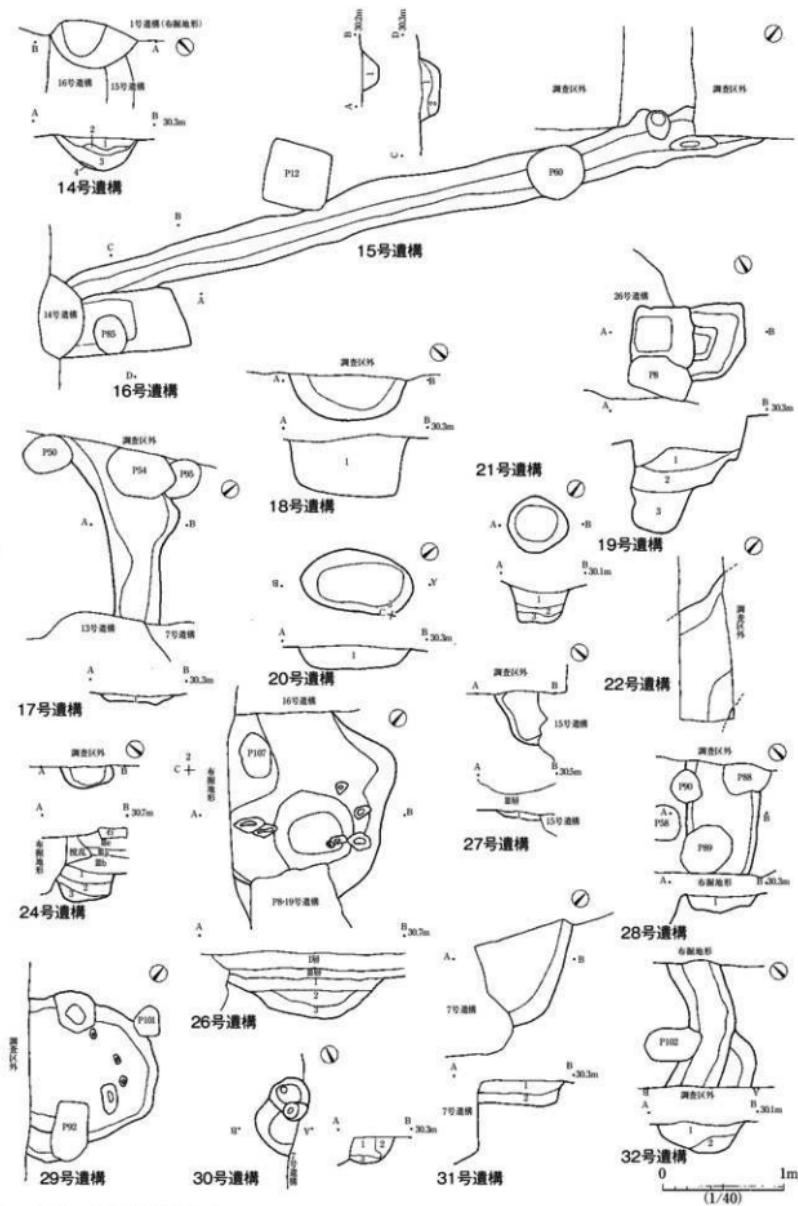
形態 平面形は楕円形で、断面形は半円形を呈する。規模は現況で長軸七〇cm×短軸三六cm、確認面からの深さは二八cmを測る。

遺物 表七。六点出土している。内訳は奈良・平安時代三点(破片二点・個体〇点)、近世一点(破片一点・個体〇点)、年代不明二点(破片二点・個体〇点)。

時期 第Ⅱ期(一七世紀後半)一七〇九年)。

遺構の性格 不明。

14号遺構~32号遺構 土層注記	
14号遺構	1 黒褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=2mm) 少量含む。緑よりや中。粘性や中。 2 黒褐色土層 (10YR4/2)・ローム粒 (φ=10mm) 多量。ロームブロック多量。炭化物 (φ=2mm) 少量含む。緑よりや中。粘性や中。
	3 黒褐色土層 (10YR2/3)・ローム粒 (φ=10mm) やや多量。ロームブロック中量。炭化物 (φ=10mm) 少量含む。緑よりや中。粘性や中。
	4 固りすぎ。
15号遺構	1 黒褐色土層 (10YR3/4)・ローム粒 (φ=5mm) 中量含む。緑より中。粘性や中。
16号遺構	1 黒褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=25mm) 多量。炭化物微含む。緑より中。粘性や中。 2 ローム主層 黑褐色土層 (10YR2/2)・少量含む。粘性。
17号遺構	1 黒褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=25mm) やや多量含む。緑よりや中。粘性弱。
18号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=30mm) 多量。炭化物微含む。緑より中。粘性や中。
19号遺構	1 黑褐色土層 (10YR3/2)・ローム粒 (φ=30mm) ごと多量含む。緑よりや中。粘性や中。 2 黑褐色土層 (10YR3/1) とローム粒 (φ=20mm) の混合層。緑よりや中。粘性や中。 3 黑褐色土層 (10YR2/1) とローム粒 (φ=30mm) の混合層。緑よりや中。粘性や中。
20号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=5mm) 中量含む。緑より中。粘性。
21号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=5mm) 少量含む。粘性。
	2 ローム主層 黑褐色土層 (10YR2/2) 中量含む。粘性や中。
	3 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=30mm) 多量含む。緑よりや中。粘性や中。
22号遺構 (東セク)	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=25mm) 多量。炭化物少量含む。粘性弱。緑より中。 2 黑褐色土層 (10YR3/2)・ローム粒 (φ=30mm) 少量含む。粘性弱。緑より中。
23号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=5mm) 少量含む。粘性弱。緑より中。 2 黑褐色土層 (10YR3/2)・ローム粒 (φ=10mm) 中量。白褐色土層少量含む。粘性弱。緑より中。 3 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=15mm) 少量含む。粘性弱。緑より中。
24号遺構	1 黑褐色土層 (10YR3/2)・ローム粒 (φ=5mm) 少量含む。粘性弱。緑より中。
25号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=1mm) 少量含む。粘性や中。緑より強。
26号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=15mm) 中量含む。粘性や中。緑より強。
27号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=1mm) 少量含む。粘性や中。緑より強。
28号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=15mm) 中量含む。粘性や中。緑より強。
29号遺構 (東セク)	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=15mm) 中量含む。粘性弱。緑よりや中。 2 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=20mm) やや多量。炭化物少量含む。粘性弱。緑より中。
30号遺構	1 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=15mm) 中量含む。粘性弱。緑よりや中。 2 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=3mm) 多量含む。緑よりや中。粘性中。 3 黑褐色土層 (10YR2/2)・ローム粒 (φ=15mm) 微含む。緑よりや中。粘性中。
31号遺構	1 黑褐色土層 (10YR4/4)・ローム粒 (φ=2mm) 微量。白色粒子少量含む。緑よりや中。粘性や中。
32号遺構	土層注記なし。



140 14号～32号遺構実測図

一五号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はB2・3区に位置する。確認面はローム層上面。

形態 溝状遺構。断面形は浅い逆台形を呈する。規模は現況で長軸一四〇cm × 短軸六四cm、確認面からの深さは八cmを測る。主軸方位はN一五一度W。

四号遺構・一六号遺構 P六〇・P一二より古く、二七号遺構より新しい。

遺物 出土遺物なし。

時期 第II期（一七世紀後半—一七〇九年）。

遺構の性格 溝状遺構。主軸方位が七号遺構と平行であることから、一体的かつ同時期に機能していた可能性は高い。水性堆積の痕跡はなく、寺院伽藍の中の小規模な区画溝と想定されよう。

一六号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はB2区に位置する。確認面はローム層上面。一四

号遺構・P八五より古く、一五号遺構より新しい。

形態 平面形は長方形。断面形は逆台形。規模は現況で長軸一一〇cm × 短軸

五〇cm、確認面からの深さは一六cmを測る。主軸方位はN一三八度Eである。

遺物 表七。七点出土している。内訳は奈良・平安時代五点（破片五点・個体〇点）、近世二点（破片一点・個体〇点）、年代不明一点（破片一点・個体〇点）。

時期 第II期（一七世紀後半—一八世紀初頭）。

遺構の性格 不明。

一七号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はB3区に位置する。確認面はローム層上面。P八

より古く、二六号遺構より新しい。

形態 平面形は方形の遺構が南北に二基切り合う形状をみせるが、土層断面の

一八号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はC2・3区に位置する。確認面はローム層上面。

形態 平面形は円形もしくは橢円形を呈しているものと思われる。断面形は箱形。規模は現況で長軸九六cm × 短軸一四cm、確認面からの深さは五〇cmを測る。

主軸方位 はN一三七度Wである。

形態 平面形は円形もしくは橢円形を呈しているものと思われる。断面形は箱形。規模は現況で長軸九六cm × 短軸一四cm、確認面からの深さは五〇cmを測る。

主軸方位 はN一三七度Wである。

遺物 表七。三点出土している。内訳は年代不明三点（破片三点・個体〇点）。

時期 第II期（一七世紀後半—一七〇九年）。

遺構の性格 不明。ただし八号遺構等の一連の植栽痕群に接していることから、植栽痕の可能性がある。

一九号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はC2区に位置する。確認面はローム層上面。P八

より古く、二六号遺構より新しい。

観察から同時廃棄と見られる。断面形は北側がややオーバーハング気味に箱形に掘り込まれ、南側は二段階に立ち上がる。規模は現況で長軸九五cm×短軸六〇cm、確認面からの深さは九七cmを測る。主軸方位はN一〇°Wである。

遺物 表七。五点が出土している。内訳は縄文時代一点(破片一点・個体〇点)、奈良・平安時代一点(破片一点・個体〇点)、近世一点(破片一点・個体〇点)、年代不明一点(破片一点・個体〇点)である。

時期 第一期(一七世紀前半)か。
第二期(一七世紀後半)か。

遺構の性格 平面形や断面形からみれば、柱穴を疑うべきかもしれないが、柱痕やアタリ等の根拠はない。いずれにせよ規格性を有したプランをしており、

第二期における寺院伽藍に関わる一連の遺構群の一つと考えたほうが、土地利用上理解しやすいものと思われる。

平面形は精円形を、断面形は皿状を呈する。規模は長軸九五cm×短軸五二cm、確認面からの深さは二〇cmを測る。主軸方位はN一三一度Eである。

遺構の性格 (一四〇)

位置・重複関係等 本遺構はB2・3、C2区に位置する。確認面はローム層上面。重複関係はない。

形態 平面形は精円形を、断面形は皿状を呈する。規模は現況で長軸六一cm×短軸八七cm、確認面からの深さは三五cmを測る。主軸方位はN一七度Eである。

遺物 表七。二点が出土している。内訳は近世二点(破片一点・個体一点)。

時期 第一期(一七世紀前半)、第二期(一七世紀後半)、八世紀初頭。

遺構の性格 区画溝と思われる。主軸方位はどの遺構とも合わず、他遺構との関係性は不明。

時期 第一期(一七世紀前半)、第二期(一七世紀後半)、八世紀初頭。

遺構の性格 不明。

二号遺構 (一四〇)

位置・重複関係等 本遺構はC4区に位置する。確認面はローム層上面。一号

遺構(布掘地形)の底面で確認された。

形態 平面形は円形を、断面形は逆台形を呈する。規模は直径五〇cm。一号遺構は現況で直軸一四cm×短軸一八cm、確認面からの深さは二〇cmを測る。

三号遺構 整理作業過程で一三号遺構に統合した。

四号遺構 (一四〇)

位置・重複関係等 本遺構はC3区に位置する。確認面はローム層上面。重複関係はない。東半分が調査区外に延びる。

形態 平面形は円形もしくは精円形を呈するものと思われる。断面形は逆台形。

構に上部が完全に削平される。一号以降底面からの深さは三〇cmであるが、仮にローム上面から掘り込まれていたとすれば深さは五〇cmを測る。

遺物 表七。四点出土している。内訳は奈良・平安時代一点(破片一点・個体〇点)、近世一点(破片一点・個体〇点)、年代不明一点(破片一点・個体〇点)。

時期 第一期(一七世紀前半)、第二期(一七世紀後半)、八世紀初頭。

遺構の性格 不明。形状からみれば柱穴を疑うべきかもしれないが、柱痕やアタリ等の根拠はない。

二号遺構 (一四〇)

位置・重複関係等 本遺構はD3区に位置する。確認面はローム層上面。重複関係はない。遺構の東西は調査区外に延びる。

形態 溝状遺構。断面形は逆台形を呈する。規模は現況で長軸六一cm×短軸八七cm、確認面からの深さは三五cmを測る。主軸方位はN一七度Eである。

遺物 表七。二点が出土している。内訳は近世二点(破片一点・個体一点)。

時期 第一期(一七世紀前半)、第二期(一七世紀後半)、八世紀初頭。

遺構の性格 区画溝と思われる。主軸方位はどの遺構とも合わず、他遺構との関係性は不明。

遺物 出土遺物なし。

時期 第Ⅰ期（一七世紀前半）か。

遺構の性格 不明。一三号遺構に近接していることから、植栽痕の一部の可能がある。

二五号遺構 欠番。

二六号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はB・C2区に位置する。確認面はローム層上面。

一六号遺構・一九号遺構・P一〇七より古い。西半分は一号遺構（布堀地形）に切られる。

遺物 表七。五点が出土している。内訳は縄文時代三点（破片三点・個体〇点）、

奈良・平安時代一点（破片一点・個体〇点）、年代不明一点（破片一点・個体〇点）である。

時期 第Ⅰ期（一七世紀前半）か。

遺構の性格 形状から植栽痕。立ち枯れ痕か。

二七号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はB・C2区に位置する。確認面はローム層上面。一五号遺構より古い。東側は調査区外に延びる。

形態 平面形は楕円形か。断面形は薄い皿状を呈する。規模は現況で直軸四六cm×短軸三五cm、確認面からの深さは八cmを測る。

遺物 表七。一点が出土している。内訳は年代不明一点（破片一点・個体〇点）。

時期 第Ⅰ期（一七世紀前半）か。

遺構の性格 不明。

二八号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はC5区に位置する。確認面はローム層上面。一一号遺構・P八八・P八九・P九〇より古い。東側は調査区外に延びる。

形態 溝状遺構。断面形は浅い逆台形を呈する。規模は現況で直軸九〇cm×短軸六〇cm、確認面からの深さは一四cmを測る。主軸方位はN一四七度-E。

遺物 出土遺物なし。

二九号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はB・C1区に位置する。確認面はローム層上面。

P九二・P一〇一より古い。上部は一号遺構の地形により削平されている。西半分は調査区外に延びる。

遺物 表九。二点が出土している。内訳は縄文時代二点（破片二点・個体〇点）、

奈良・平安時代二点（破片二点・個体〇点）、年代不明二点（破片二点・個体〇点）である。

遺構の性格 区画溝と思われる。主軸方位はローム層上面のどの遺構とも合わず、他遺構との関係性は不明。

二九号遺構（一四〇）

位置・重複関係等 本遺構はB・C1区に位置する。確認面はローム層上面。

軸一〇cm、確認面からの深さは三〇cmを測る。主軸方位はN一四七度-E。

遺物 一四九・表五・七。二点が出土している。内訳は縄文時代二点（破片二点・個体〇点）、奈良・平安時代七点（破片七点・個体〇点）、近世二点（破片二点・個体〇点）、年代不明七点（破片七点・個体〇点）である。

遺構の性格 形状から植栽痕。立ち枯れ痕か。

時期 第Ⅰ期（一七世紀前半）。

遺構の性格 形状から植栽痕。立ち枯れ痕か。

三〇号遺構（一四〇）

位置・重複關係等 本遺構はB4区に位置する。確認面はローム層上面。七号遺構より古い。

形態 平面形は二基の円形状のピットが切り合うような形状を呈する。断面形は半円形を呈する。規模は現況で直軸六二cm×短軸三五cm、確認面からの深さは二二cmを測る。主軸方位はN—四四度—Eである。

遺物 表七。一点が出土している。内訳は奈良・平安時代一点（破片一点・個体○点）である。

時期 第一期（一七世紀前半）。

遺構の性格 形状から植栽痕。

三一号遺構（一四〇）

位置・重複關係等 本遺構はC2・3区に位置する。確認面はローム層上面。

七号遺構より古い。

形態 平面形は扁状で、断面形は逆台形を呈する。規模は現況で直軸六二cm×

短軸三五cm、確認面からの深さは二二cmを測る。

遺物 表七。三点が出土している。内訳は繩文時代一点（破片一点・個体○点）、奈良・平安時代一点（破片一点・個体○点）、近世一点（破片一点・個体○点）。

時期 第一期（一七世紀前半）。

遺構の性格 不明。

三二号遺構（一四〇）

位置・重複關係等 B1区に位置する。確認面はローム層上面。P一〇二より古い。東側は一号遺構（布掘地形）に切られ、西側は調査区外に延びる。

形態 溝状遺構。断面形はレンズ状を呈する。規模は現況で直軸一一〇cm×短

軸七二cm、確認面からの深さは二三cmを測る。主軸方位は東側がN—四七度—Eだが、途中で屈曲し、N—四五度—W方向に西側に延びてゆく。

遺物 表七。一点が出土している。内訳は近世一点（破片一点・個体○点）。

時期 第二期（一七世紀後半—一七〇九年）か。

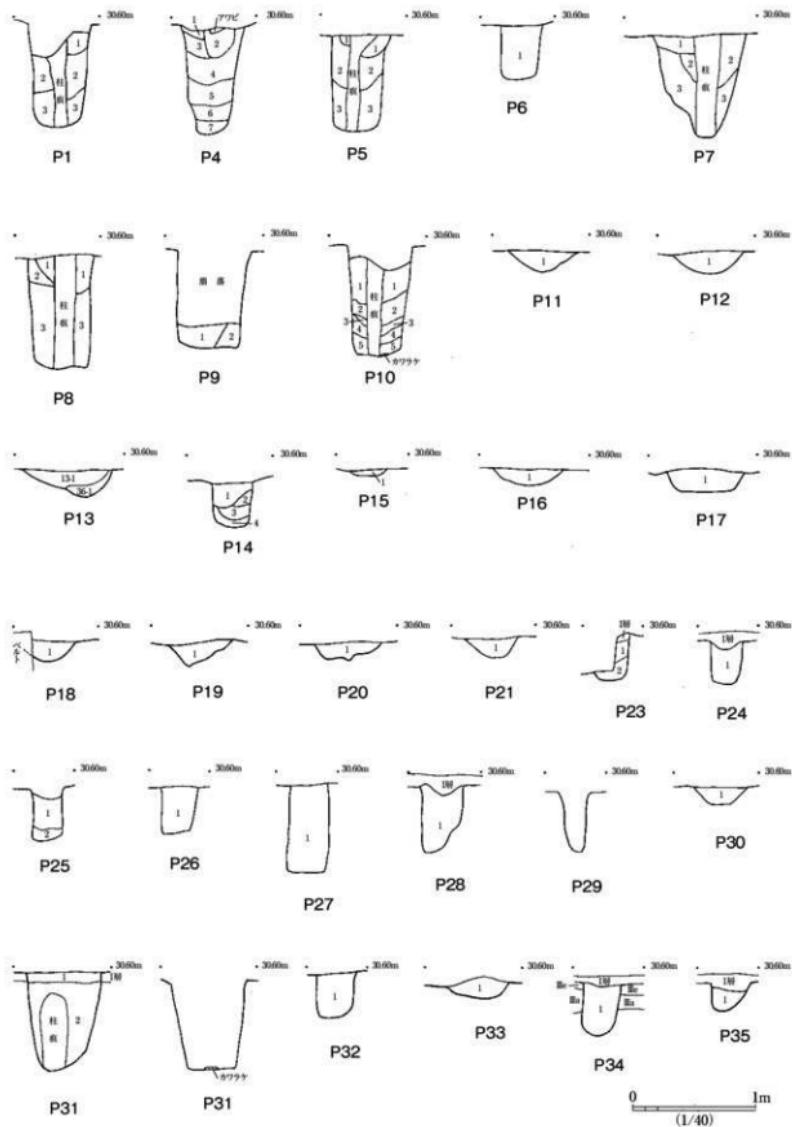
遺構の性格 溝状遺構。平面プランから推定すれば、一五号遺構の延長線上にあることから、同一の遺構と想定される。

三 ピット

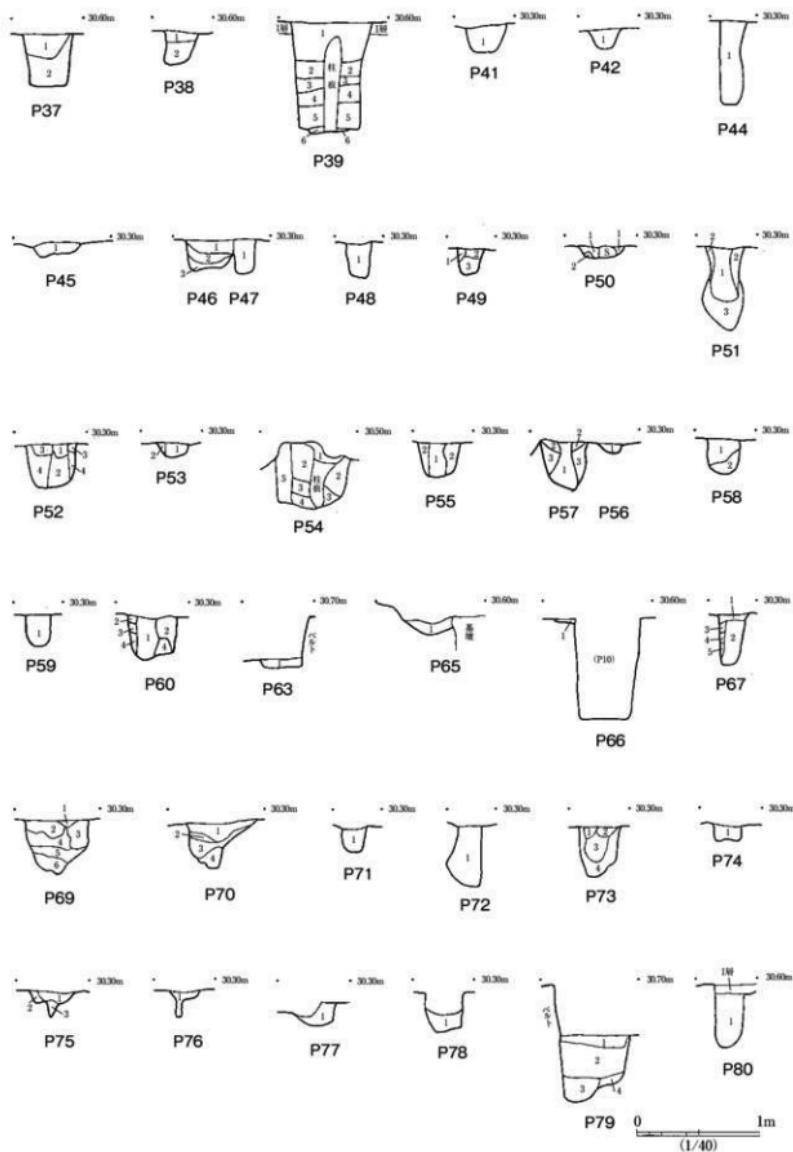
ピットはP一よりP一—五まで検出された。うち他遺構への統合や欠番がないため、報告するのは一〇四基である。

III層上面とローム層上面の二面より検出され、前者が四八基、後者が五五基を数える。III層上面の平面配置は一三七で、ローム層上面の平面配置は一三八に明記した。断面図は一四一—一四三に、規模や覆土等は表四に一括して示した。

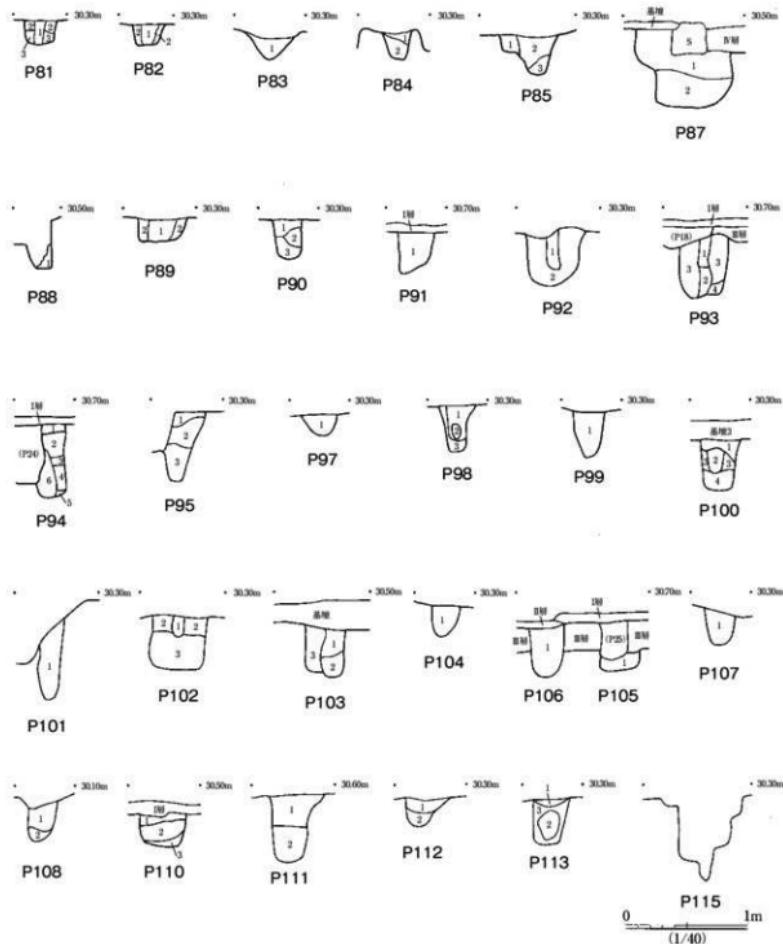
ところで今次調査で検出したピットのうち、特にIII層上面は三号遺構・四号遺構・五号遺構・六号遺構を構成するピットとして整理したものが多いのが特徴である。通常は遺構として認識されたピットは「〇号遺構—P〇」のように遺構ごとに枝番を振り、通常のピットとは別に把握することが多いが、本調査では通常のピットと同様に扱っている。ただしピット一覧表や遺物観察表、遺物一覧表などの各集計表では遺構名を併記し、混乱を避けるよう配慮した。



141 ピット土層断面図（1） P 1～P 35



142 ピット土層断面図 (2) P 37 ~ P 80



143 ピット土層断面図(3) P 81～P 115

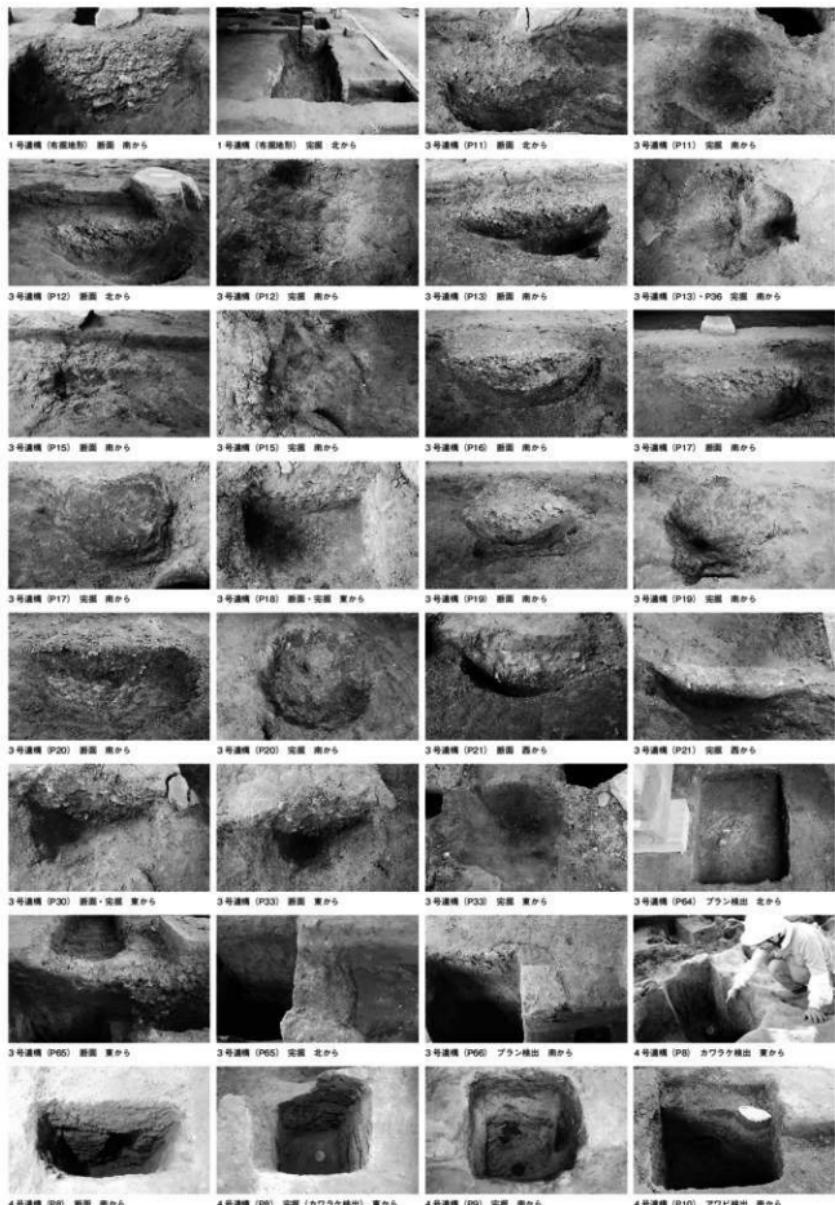
表4 ピット一覧表

番号	Grid	標高	断面 (cm) 長径×幅径×深さ	遺土	時期	出土 物
P1 (3号遺構)	B3-4	Ⅲ層上	58 × 50 × 84	1. 黄褐色土層 (10YR2/2) とローム粒 ($\phi \sim 20\text{mm}$) の混合層。縦まり強。粘性やや弱。 2. 黄褐色土層 (10YR4/6)、ローム粒 ($\phi \sim 40\text{mm}$) 多量含む。縦まり強。粘性弱。 3. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 20\text{mm}$) 中量含む。縦まり強。粘性弱。	V期	なし
P2						表7
P3						表7
P4 (3号遺構)	B2	Ⅲ層上	70 × 50 × 90	1. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 多量、小石 ($\phi 25\text{mm}$) 少量含む。縦まり弱。粘性弱。 2. 黄褐色土層 (10YR4/6)、ローム粒 ($\phi \sim 40\text{mm}$) 多量含む。縦まり強。粘性弱。 3. 黄褐色土層 (10YR4/4)、ローム粒 ($\phi \sim 30\text{mm}$) やや多量含む。縦まり弱。粘性弱。 4. ローム粒付。褐色土 (10YR4/4) 中量含む。縦まりやや弱。粘性弱。	V期	148 表5-7
P5 (3号遺構)	C3-4	Ⅲ層上	52 × 44 × 79	1. 黄褐色土層 (3/4)、ローム粒 ($\phi \sim 33\text{mm}$) 玄体。縦まり強。粘性やや弱。 2. 黄褐色土層 (2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 多量含む。縦まり弱。粘性弱。 3. 黄褐色土層 (2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 30\text{mm}$) 少量含む。縦まり弱。粘性弱。	V期	表7
P6 (3号遺構)	C3	Ⅲ層上	54 × 50 × 94	1. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) やや多量含む。縦まりやや強。粘性弱。 2. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) やや多量含む。縦まり弱。粘性弱。 3. 黄褐色土層 (10YR2/3) とローム粒 ($\phi \sim 50\text{mm}$) の混合層。縦まり強。粘性やや弱。	Ⅳ-Ⅴ期	表7
P7 (3号遺構)	C2	Ⅲ層上	52 × 50 × 94	1. 黄褐色土層 (10YR5/6)、ローム粒 ($\phi \sim 35\text{mm}$) 多量含む。縦まりやや強。粘性弱。 2. 黄褐色土層 (10YR5/6)、ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) やや多量含む。縦まり弱。粘性弱。 3. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 30\text{mm}$) やや多量含む。縦まり弱。粘性弱。	V期	表7
P8 (4号遺構)	C4	Ⅲ層上	60 × 56 × 80	1. 黄褐色土層 (2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 少量含む。縦まり弱。粘性弱。 2. 黄褐色土層 (3/3)、ローム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) やや多量含む。縦まり弱。粘性弱。	V期	148 表5-7
P9 (4号遺構)	C4	Ⅲ層上	54 × 52 × 90	1. 黄褐色土層 (10YR3/2)、ローム粒 ($\phi \sim 45\text{mm}$) の混合層。縦まり中。粘性中。 2. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 40\text{mm}$) やや多量、炭化物微量含む。縦まり強。粘性弱。 3. 黄褐色土層 (10YR6/6)、ローム粒 ($\phi \sim 40\text{mm}$) 多量。白い粒子少量含む。縦まりやや弱。粘性中。 4. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 20\text{mm}$) やや多量含む。縦まり弱。粘性弱。 5. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) 中量含む。縦まり弱。粘性弱。	V期	148 表5-7
P10 (4号遺構)	B2	Ⅲ層上	60 × 56 × 17			
P11 (3号遺構)	B3-4	Ⅲ層上	60 × 56 × 17			なし
P12 (3号遺構)	B2-3	Ⅲ層上	65 × 52 × 19	1. 黄褐色土 (10YR3/3) と雜 (15 ~ 30mm) の混合層。白色粒子少量含む。縦まり強。粘性なし (3号遺構統一土層)。	V期	なし
P13 (3号遺構)	B4	Ⅲ層上	62 × 36 × 22			なし
P14	C1	Ⅲ層上	36 × 34 × 36	1. 黄褐色土 (10YR3/2) とローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) の混合層。縦まり強。粘性やや弱。 2. 黄褐色土層 (10YR3/3)、ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 中量含む。縦まり強。粘性やや弱。 3. 黄褐色土層 (10YR2/4)、ローム粒 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 少量含む。縦まりやや強。粘性中。 4. 黄褐色土層 (10YR4/4)、ローム粒 ($\phi \sim 20\text{mm}$) 少量含む。縦まり強。粘性弱。	Ⅳ-Ⅴ期	なし
P15 (3号遺構)	B2	Ⅲ層上	64 × 38 × 5			なし
P16 (3号遺構)	C4	Ⅲ層上	50 × 40 × 14			表7
P17 (3号遺構)	C3	Ⅲ層上	78 × 62 × 19			表7
P18 (3号遺構)	C3	Ⅲ層上	60 × 58 × 18	1. 黄褐色土 (10YR3/3) と雜 (15 ~ 30mm) の混合層。白色粒子少量含む。縦まり強。粘性なし (3号遺構統一土層)。	V期	なし
P19 (3号遺構)	C2-3	Ⅲ層上	58 × 46 × 20			なし
P20 (3号遺構)	C2	Ⅲ層上	62 × 52 × 15			148 表5-7
P21 (3号遺構)	A3	Ⅲ層上	45 × 44 × 15			なし
P22	B2	Ⅲ層上	64 × 56 × 86	1. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 中量。小石 ($\phi 25 \sim 40\text{mm}$) 少量含む。縦まりやや強。粘性弱。 2. 黄褐色土層 (10YR6/6)、ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 多量含む。縦まり弱。粘性弱。	Ⅳ-Ⅴ期	なし
P23 (6号遺構)	B4	Ⅲ層上	25 × 18 × 35	1. 白い層 (10YR4/4) と雜 (15 ~ 30mm) の混合層。ローム粒 ($\phi \sim 30\text{mm}$) やや多量含む。縦まり強。粘性弱。	V期	表7
P24 (6号遺構)	B4	Ⅲ層上	28 × 14 × 35	1. 黄褐色土層 (10YR3/4)、小石 ($\phi 20 \sim 45\text{mm}$) 多量。ニーム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) 中量含む。縦まり弱。粘性弱。	V期	なし
P25 (6号遺構)	B2	Ⅲ層上	34 × 28 × 44	1. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 5\text{mm}$) 少量。小石 ($\phi \sim 50\text{mm}$) 少量含む。縦まり強。粘性弱。	V期	なし
P26 (6号遺構)	B-C4	Ⅲ層上	34 × 30 × 38	1. 黄褐色土層 (2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 多量、小石 ($\phi \sim 30\text{mm}$) 多量含む。縦まりやや弱。粘土層。	V期	なし
P27 (6号遺構)	B-C4	Ⅲ層上	34 × 32 × 73	1. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) 少量。炭化物微量含む。縦まりやや強。粘性弱。	V期	なし
P28 (6号遺構)	C3	Ⅲ層上	42 × 32 × 36	1. 黄褐色土層 (3/4)、ローム粒 ($\phi \sim 30\text{mm}$) 中量含む。縦まり弱。粘性弱。	V期	表7
P29	C3	Ⅲ層上	28 × 24 × 50	1. 土層記述なし。	Ⅳ-Ⅴ期	なし
P30 (3号遺構)	B3	Ⅲ層上	50 × 44 × 15	1. 黄褐色土 (10YR3/3) と雜 (15 ~ 30mm) の混合層。白色粒子少量含む。縦まり強。粘性なし (3号遺構統一土層)。	V期	表7
P31 (4号遺構)	A3	Ⅲ層上	60 × 56 × 80	1. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 30\text{mm}$) 玄体。縦まり強。粘性やや弱。 2. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 30\text{mm}$) 多量含む。縦まり強。粘性弱。	V期	148 表5-7
P32 (3号遺構)	B3	Ⅲ層上	34 × 32 × 39	1. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 少量含む。縦まり強。粘性弱。	Ⅳ-Ⅴ期	なし
P33 (3号遺構)	B3	Ⅲ層上	58 × 54 × 16	1. 黄褐色土 (10YR3/3) と雜 (15 ~ 30mm) の混合層。白色粒子少量含む。縦まり強。粘性なし (3号遺構統一土層)。	V期	なし
P34 (6号遺構)	C2	Ⅲ層上	36 × 32 × 45	1. 黄褐色土 (10YR4/4)、ローム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) やや多量、小石 ($\phi 15 \sim 40\text{mm}$) 中量。片岩 (100mm) 中量含む。縦まりやや強。粘性弱。	V期	表7
P35 (6号遺構)	B3	Ⅲ層上	42 × 32 × 24	1. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 20\text{mm}$) やや多量含む。縦まり強。粘性弱。	V期	表7
P36	B4	Ⅲ層上	48 × 40 ×	1. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) 少量含む。縦まり強。粘土層。	Ⅳ-Ⅴ期	表7
P37	A3	Ⅲ層上	46 × 38 × 43	1. 黄褐色土層 (10YR2/2)、ローム粒 ($\phi \sim 10\text{mm}$) 少量含む。縦まり強。粘性弱。	Ⅳ-Ⅴ期	なし
P38 (6号遺構)	A3	Ⅲ層上	36 × 30 × 25	1. 黄褐色土層 (10YR2/3)、ローム粒 ($\phi \sim 15\text{mm}$) 中量。白色粒子微量。縦まり強。粘性弱。 2. 黄褐色土層 (10YR3/4)、ローム粒 ($\phi \sim 25\text{mm}$) 少量含む。縦まり中。粘性弱。	V期	なし

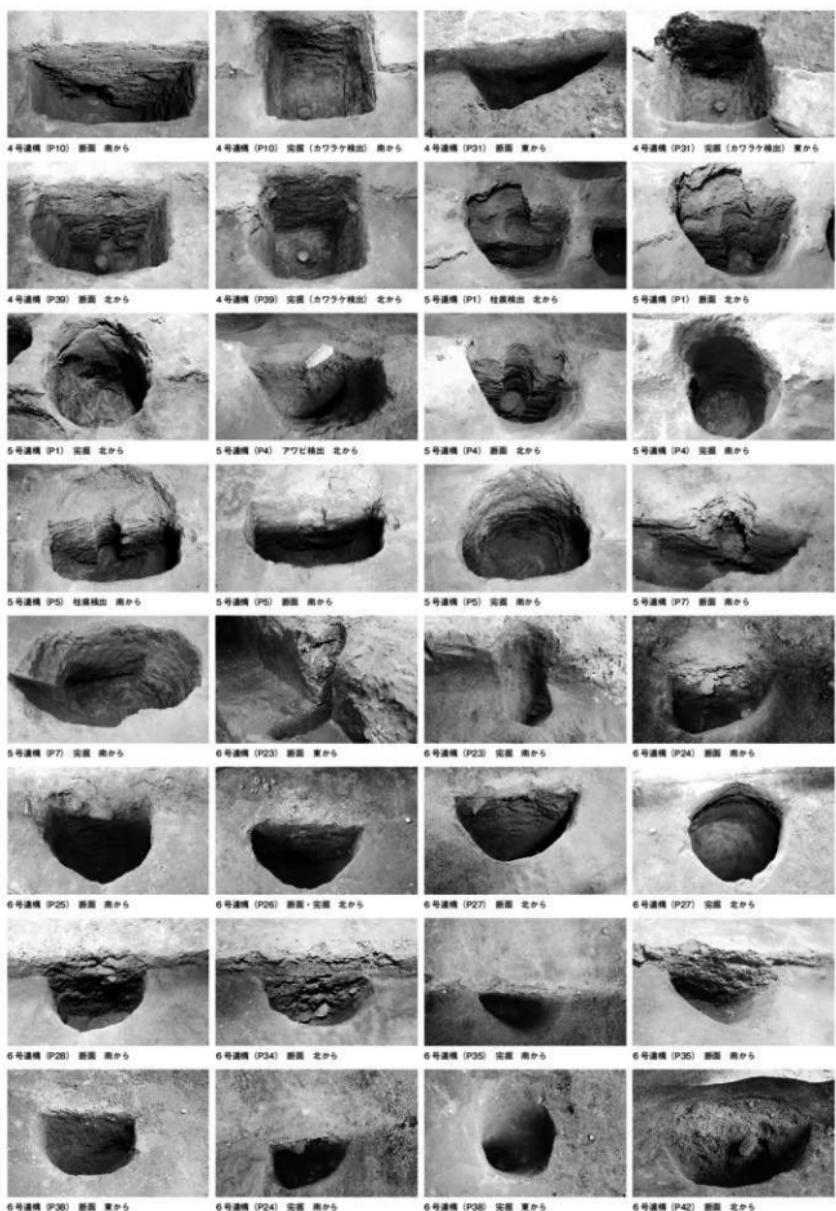
番号	Grid	標高	断面(α) 長さ×幅さ×深さ	地質	時期	出土 遺物
P79	C3	ローム上	64 × 40 × 35	1 黒褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 多量。粘土質含む。縮まりやや強。粘性やや弱。 2 黒褐色土層 (10YR3-4)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 多量含む。縮まりやや強。粘性やや弱。 3 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性弱。 4 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性弱。	I - II 期 表7	
P80 (6号遺構)	C3	Ⅲ層上		1 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 5mm) やす多量含む。縮まりやや強。粘性弱。		Ⅲ期 なし
P81	A3	ローム上		1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性弱。 2 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性弱。 3 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性弱。		I - II 期 なし
P82	A3	ローム上		1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性弱。 2 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性弱。		I - II 期 なし
P83	C3	ローム上	30 × 30 × 60	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 10mm) やす多量。炭化物 (φ ~ 3mm) 少量。粘土質含む。粘性やや強。縮まり強。 2 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 10mm) やす多量含む。粘性やや強。縮まり強。 3 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性弱。	I - III 期 表7	
P84	B2	ローム上		1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 10mm) やす多量含む。縮まりやや強。粘性弱。		I - II 期 表7-5
P85	B2	ローム上		1 ローム粒主体。黒褐色土層 (10YR2/2) 多量含む。縮まりやや強。粘性弱。 2 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性弱。 3 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 多量含む。縮まりやや強。粘性弱。		I - II 期 なし
P86	7号遺構-P1に接続					
P87	C5	Ⅲ層上	44 × 24 × 64	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 5mm) 中量含む。粘性中。縮まり弱。 2 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 30mm) 多量含む。粘性中。縮まり弱。	Ⅲ - V 期 なし	
P88	C5	ローム上	38 × 28 × 39	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 10mm) 中量含む。粘性中。縮まり弱。	I - III 期 なし	
P89	C4-5	ローム上	38 × 38 × 30	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 少量含む。縮まりやや弱。粘性弱。 2 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 5mm) 中量含む。縮まりやや弱。粘性弱。	I - II 期 なし	
P90	C5	ローム上	32 × 36 × 32	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 1mm) 中量含む。縮まりやや弱。粘性中。 2 ローム粒主体。黒褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 1mm) 中量含む。縮まりやや弱。粘性中。中弱。 3 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 多量含む。縮まりやや弱。粘性中。	I - II 期 表7	
P91 (6号遺構)	B3	Ⅲ層上	34 × 30 × 34	1 土層記注なし。	Ⅲ期 表7	
P92	C1	ローム上	40 × 28 × 46	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 少量含む。縮まり弱。粘性中。 2 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 10mm) 多量含む。縮まりやや強。粘性弱。	I - II 期 なし	
P93	C5	Ⅲ層上	42 × 36 × 59	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 3mm) やす多量。炭化物 (φ ~ 3mm) 少量含む。粘性弱。縮まり強。 2 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 多量。ローム粒ブロック中量。炭化物、小石 (φ ~ 20mm) 少量含む。粘性弱。縮まり強。 3 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 多量含む。縮まり弱。粘性弱。	Ⅲ - V 期 表7	
P94	B4	Ⅲ層上	50 × 28 × 60	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 多量。白色物少。白色物土層含む。粘性弱。縮まり強。 2 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 15mm) 多量。白色物土層含む。粘性弱。縮まり強。 3 ローム粒主体。黒褐色土 (10YR2/2) 多量含む。粘性中。中弱。 4 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 多量。白色物土層含む。粘性弱。縮まり強。 5 黑褐色土層 (10YR2/1)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 中量含む。粘性弱。縮まりやや弱。 6 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 21mm) 多量含む。粘性弱。縮まり強。	Ⅲ - V 期 表7	
P95	B3	ローム上		1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒中量含む。縮まり中。粘性中。 2 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 中量含む。縮まりや中。粘性中。 3 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 多量含む。縮まりやや弱。粘性中。		I - II 期 なし
P96	欠番					
P97	B-C4	ローム上	36 × 24 × 17	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 10mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性弱。	I - II 期 なし	
P98	C4	ローム上	28 × 28 × 39	1 黑褐色土層 (10YR1/1)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 少量。炭化物微量含む。縮まり中。粘性弱。 2 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 多量含む。縮まりやや強。粘性弱。	I - II 期 表7-5	
P99	C4	ローム上	35 × 24 × 38	1 黑褐色土層 (10YR1/1)。ローム粒 (φ ~ 1mm) 中量含む。縮まり弱。粘性弱。	I - II 期 表7	
P100	C1	ローム上	30 × 28 × 42	1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 10mm) 中量含む。縮まり中。中弱。 2 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 20mm) 中量含む。縮まり中。中弱。 3 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 20mm) 多量含む。縮まりやや強。粘性弱。 4 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 15mm) 多量含む。縮まり中。中弱。	I - II 期 なし	
P101	B-C1	ローム上		1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性中。柱根。		I - II 期 なし
P102	B1	ローム上		1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 10mm) 多量含む。縮まり弱。粘性中。柱根。 2 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 10mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性中。柱根。		I - II 期 なし
P103	B1	Ⅲ層上		1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性中。柱根。 2 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 15mm) 多量含む。縮まりやや強。粘性中。柱根。 3 黑褐色土層 (10YR4/4)。ローム粒 (φ ~ 2mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性中。柱根。		Ⅲ - V 期 なし
P104	B-C5	ローム上	38 × 26 × 25	1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 3mm) 多量含む。縮まり中。粘性中。柱根。	I - II 期 なし	
P105	B2	ローム上	34 × 22 × 41	1 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 30mm) 多量含む。縮まりやや強。粘性中。	I - II 期 なし	
P106	B2	Ⅲ層上	30 × 28 × 43	1 黑褐色土層 (10YR3/5)。ローム粒 (φ ~ 25mm) 多量。炭化物・白色粒子 (φ ~ 20mm) 多量含む。粘性弱。縮まり強。	Ⅲ - V 期 なし	
P107	B-C2	ローム上	36 × 24 × 30	1 黑褐色土層 (10YR3/5)。ローム粒 (φ ~ 5mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性中。	I - II 期 なし	
P108	B1	ローム上	34 × 28 × 34	1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 20mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性中。 2 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 5mm) 多量含む。縮まりやや強。粘性中。 3 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 1mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性中。	I - II 期 表7	
P109	欠番					
P110	B1	Ⅲ層上	36 × 34 × 25	1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 5mm) 中量。白色粒少量含む。縮まり中。 2 黑褐色土層 (10YR3/3)。白色粒子 (φ ~ 5mm) 多量含む。縮まりやや弱。粘性中。 3 黑褐色土層 (10YR2/3)。白色粒子 (φ ~ 5mm) 少量含む。縮まりやや強。粘性中。 4 黑褐色土層 (10YR4/6)。ローム粒主体。縮まり強。粘性中。	Ⅲ - V 期 なし	
P111	A3	Ⅲ層上	44 × 30 × 35	1 黑褐色土層 (10YR2/3)。砾 (φ ~ 30mm) 多量含む。縮まり中。粘性中。	Ⅲ - V 期 なし	
P112	B3	ローム上	36 × 24 × 24	1 黑褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 (φ ~ 8mm) 中量含む。縮まり中。粘性中。	I - II 期 なし	
P113	B3	ローム上	32 × 32 × 39	1 黑褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 (φ ~ 8mm) 中量含む。縮まり中。粘性中。 2 黑褐色土層 (10YR3/2)。ローム粒 (φ ~ 5mm) 多量含む。縮まり中。粘性中。 3 黑褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 (φ ~ 1mm) 中量含む。縮まりやや強。粘性中。	I - II 期 なし	
P114	欠番					
P115	B-C5	ローム上	24 × 30 × 70	1 土層記注なし。	I - II 期 なし	

表4 ピット一覧表(つづき)

番号	Grid	標高(m)	規模 (m) 長さ×幅さ×深さ	遺土	時期	出土 遺物
P29 (4号遺構)	B4 Ⅲ層上	68 × 66 × 92	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 4mm$) の混在。小石 ($\phi \sim 20mm$) 少量含む。縛まり中。粘性やや弱。		V期	148 表5-7
			2 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり弱。粘性弱。			
			3 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 3mm$) の混合。縛まり強。粘性やや弱。			
			4 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 1mm$) 少量含む。縛まり弱。粘性弱。			
			5 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量。ロームブロック ($\phi \sim 100mm$) 少量含む。縛まり弱。粘性弱。			
			6 線りヨーローム			
P40	C3	7号遺構上に統合				
P41	C2	ローム上	38 × 34 × 22	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) やや多量含む。縛まり弱。粘性やや弱。	I・II期	なし
P42	B-C2	ローム	30 × 22 × 16	1 土層注記なし。	V期	なし
P43	欠番					
P44	C3	ローム上	29 × 18 × 26	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中強。粘性弱。	I・II期	表7
P45	B2-B3	ローム	32 × 36 × 12	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中強。粘性弱。	I・II期	なし
P46	B3	ローム上	50 × 38 × 25	2 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中強。粘性弱。	I・II期	表7
			3 塗褐色土層 (10YR2/4)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中。粘性弱。			
P47	B3	ローム上	26 × 24 × 29	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中強。粘性弱。	I・II期	なし
P48	C3	ローム上	22 × 20 × 30	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中強。粘性弱。	I・II期	なし
P49	B3	ローム上	28 × 30 × 22	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量。共物微細含む。縛まり中。粘性弱。	I・II期	なし
			2 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量。共物微細含む。縛まり中。粘性弱。			
P50	B3	ローム上	42 × 34 × 10	1 塗褐色土層 (10YR2/4)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中強。粘性弱。2番はローム表面層	I・II期	なし
P51	B4	ローム	32 × 32 × 69	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 3mm$) 中量含む。縛まり中。粘性弱。	I・II期	なし
			2 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中。粘性弱。			
P52	B4	ローム	44 × 44 × 37	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中。粘性弱。	I・II期	なし
			2 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中。粘性弱。			
P53	B2	ローム上	24 × 30 × 12	1 塗褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 ($\phi \sim 1mm$) 混在。樹木含む。縛まり弱。粘性弱。柱根	V期	なし
P54	B3	ローム上	58 × 38 × 55	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 少量含む。縛まり強。粘性弱。	I・II期	なし
P55	B3	ローム上	34 × 30 × 29	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり強。粘性弱。	I・II期	表7
P56	B5	ローム上	18 × 18 × 9	1 上層注記なし。	I・II期	なし
P57	B4-B5	ローム上	38 × 36 × 43	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 3mm$) 中量含む。縛まり中。粘性やや弱。柱根	I・II期	なし
			2 塗褐色土層 (10YR2/4)。ローム粒 ($\phi \sim 3mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。			
P58	C5	ローム上	30 × 28 × 29	1 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中。粘性やや弱。	I・II期	表7
P59	B2	ローム上	20 × 19 × 35	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 1mm$) 中量含む。縛まり中。粘性やや弱。柱根	I・II期	なし
P60	B3	ローム上	48 × 46 × 37	1 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中。粘性やや弱。柱根	I・II期	表7
P61	欠番					
P62	欠番					
P63	C3	ローム上	42 × 20 × 42	1 塗褐色土層 (10YR3/4)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり強。粘性やや弱。	I・II期	なし
(3号遺構)	A2 Ⅲ層上	44 × 34 × -	- ブラン標識のみのため。土層注記なし。		V期	なし
(3号遺構)	B4 Ⅲ層上	60 × 38 × 23	1 塗褐色土層 (10YR3/1) と礫 ($\phi \sim 15 \sim 30mm$) の混合層。白色粒子少量含む。縛まり強。粘性なし。(3号遺構-1土層)。		なし	なし
(3号遺構)	B2 Ⅲ層上	40 × 20 × 83	1 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。		I・II期	なし
P64	A2	ローム上	44 × 34 × -	-		
P65	B4	ローム上	58 × 38 × 23	-		
(3号遺構)	B2 Ⅲ層上	40 × 20 × 83	1 塗褐色土層 (10YR3/1) と礫 ($\phi \sim 15 \sim 30mm$) の混合層。白色粒子少量含む。縛まり強。粘性なし。(3号遺構-1土層)。		なし	なし
P67	B4	ローム上	26 × 22 × 42	1 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。	I・II期	なし
P68	ローム上面に統合					表7
P69	B4 ローム上	58 × 40 × 46	1 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 3mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。		I・II期	なし
			2 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中。粘性弱。			
			3 塗褐色土層 (10YR2/4)。ローム粒 ($\phi \sim 10mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。			
			4 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。			
			5 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中。粘性やや弱。			
			6 塗褐色土層 (10YR2/2)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり中。粘性やや弱。			
P70	B3	ローム上	48 × 30 × 39	1 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 3mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。	I・II期	なし
P71	B5	ローム上	22 × 22 × 30	1 塗褐色土層 (10YR4/4)。ローム粒 ($\phi \sim 5mm$) 多量含む。縛まりやや弱。粘性やや弱。	I・II期	なし
P72	B5	ローム上	24 × 22 × 30	1 塗褐色土層 (10YR4/6)。ローム粒 ($\phi \sim 5mm$) 多量含む。縛まりやや弱。粘性やや弱。	I・II期	表7
P73	B1-1	ローム上	40 × 36 × 42	1 塗褐色土層 (10YR4/6)。ローム粒 ($\phi \sim 5mm$) 多量含む。縛まりやや弱。粘性弱。	I・II期	なし
P74	B2	ローム上	42 × 14 × 15	1 塗褐色土層 (10YR4/3)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。共物微細含む。縛まり強。粘性弱。	I・II期	なし
P75	B-C2	ローム上	46 × 38 × 22	1 塗褐色土層 (10YR3/2)。ローム粒 ($\phi \sim 1mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。	I・II期	なし
P76	B2	ローム上	28 × 26 × 21	3 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。	I・II期	なし
P77	B1	ローム上	32 × 22 × 19	1 塗褐色土層 (10YR5/6)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 多量含む。縛まり中。粘性やや弱。	I・II期	149 表5-7
P78	B2	ローム上	34 × 30 × 33	1 塗褐色土層 (10YR2/3)。ローム粒 ($\phi \sim 2mm$) 中量含む。縛まり強。粘性やや弱。	I・II期	表7



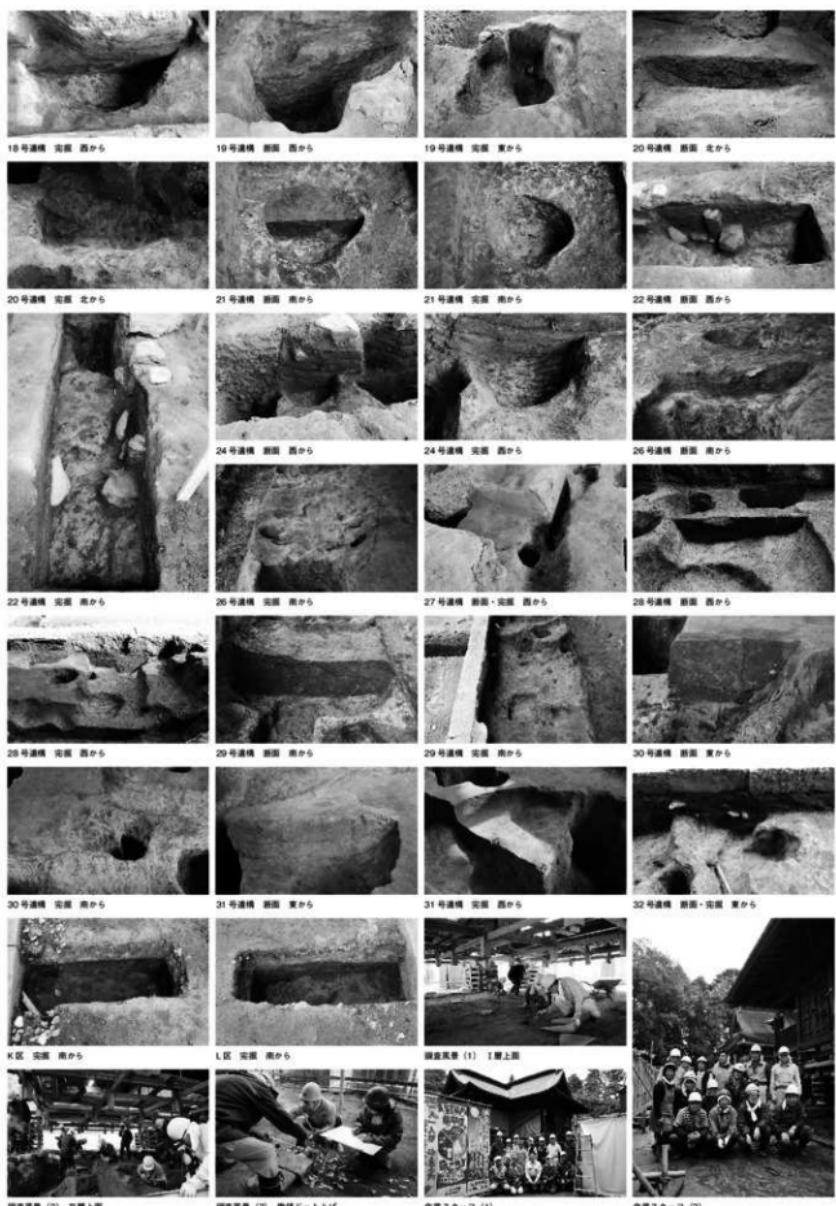
144 遺構写真 (1) 1号遺構～4号遺構



145 遺構写真 (2) 4号遺構～6号遺構



146 遺構写真 (3) 6号遺構～18号遺構



147 遺構写真 (4) 18号遺構～32号遺構ほか

第四節 出土した遺物

今次調査では、個体・破片を含む全一二九点の遺物が出土した。これらの

全てを個体・破片ごとに分類・カウントし、出土遺物一覧表として提示した（表

七）。実測遺物は個体・破片を問わず遺跡・遺構・包含層・遺構確認面等の性

格や年代を窺う上で参考となるものを中心に抽出し、四九点を図示した。さら

にⅠ層上面でドット上げした四二〇点の銭貨のうち一〇七点を図示した。

各遺構ごとの出土遺物については前節および表七によって示しているため、本節では各時代ごとの様相を記す。なお、抽出点数の多い出土銭貨については、撒錢という特徴的な出土状況であり、理解を容易にするため項目を改めて別にその様相を示すこととする（縄文時代及び奈良・平安時代の遺物の同定は川口武彦の、貝類遺体の同定は阿部常樹氏の助力を得た）。

一 縄文時代の遺物

概要 縄文時代の遺物は四七点出土している。全て破片で遺構に伴うものはない。以下型式ごとに内訳を示す。

早期 三戸式土器：一点、田戸下層式土器：六点、茅山下層式土器：一点、茅山上層式土器：六点、貝殻条痕文系土器：一二点、沈線文系土器：三点、早期後半：一点、早期もしくは前期：一点。

前期 関山式：九点、前期：一点

不明 五点

所見 以上のように、今次調査では早期前半から前期前半までの縄文土器が出土した。遺構・ピット・遺構確認面・包含層等、集中することなくまばらに出土している。出土状態からは本調査区の至近に集落等が展開しているかどうかは不明であり、散布地という位置づけが妥当であろう。しかし今次調査出土遺物の一三%が奈良・平安時代の遺物であり、破片が大半とはいえない、相応の出土率であることを踏まえれば、調査区の周間に集落等が展開している可能性は少なくないと思われる。なお、本殿の発掘調査では一〇世紀代の足高高台枕をはじめ約二〇点の土師器・二点の須恵器の出土が報告されて

は不明であり、散布地という位置づけが妥当である。なお、本殿の発掘調査報告では縄文土器の出土は報告されていない。調査区の周間に何らかの遺構がある可能性は高い。

二 奈良・平安時代の遺物

概要 奈良・平安時代の遺物は一九六点出土している。うち破片が一九五点、個体が一点である。遺構に伴うものはない。このうち二点を図示した（一四九—一四二七）。二七は平安時代に比定されるものであり、ほかの遺物の様相をみて、九世紀以降と思われるものが多い。以下須恵器・土師器ごとに内訳を示す。

須恵器 破片四〇点が出土している。器種毎の内訳は壺が四点（うち木葉下窓跡群産二点）、高杯一点、壺二点（うち木葉下窓跡群産八点）、壺蓋三点、器種不明一点（うち木葉下窓跡群産二点）である。

土師器 破片一五五点、個体一点が出土している。器種毎の内訳は壺三八点（うち個体一点、内黒二六点）、高杯四点（うち内黒一点）、足高高台枕一点、壺一六点、器種不明九七点（うち内黒六点）である。

所見 縄文時代の遺物同様、遺構・ピット・遺構確認面・包含層等、集中することなくまばらに出土している。出土状態からは本調査区の至近に集落等が展開しているかどうかは不明であり、散布地という位置づけが妥当であろう。しかし今次調査出土遺物の一三%が奈良・平安時代の遺物であり、破片が大半とはいえない、相応の出土率であることを踏まえれば、調査区の周間に集落等が展開している可能性は少くないと思われる。なお、本殿の発掘調査では一〇世紀代の足高高台枕をはじめ約二〇点の土師器・二点の須恵器の出土が報告されて

三 近世の遺物

と考えてよいものと思われる。本地区出土のカワラケ編年については第五節を参照されたい。

概要 近世の遺物は五八二点出土している（銭貨を含む）。うち破片が三五七点、個体が二二五点である。このうち四五点を図示した（銭貨を除く）。以下、別個ごとに内訳を示す。なお銭貨は後述するためここでは対象外とする。

磁器 破片二〇点が出土している。產地毎の内訳は肥前系が一二点、瀬戸・美濃系が二点、在地系が六点である。器種は碗が主体だが、器種組成に目立った偏差は認められない。

陶器 破片二九点が出土している。產地毎の内訳は京・信楽系が五点、瀬戸・美濃系が一二点、志戸呂産が一点、常滑産が一点、在地系が八点、產地不明が二点である。器種は碗・皿・鉢・壺・徳利・擂鉢等が出土している。器種組成に目立った偏差は認められない。

焼結陶器 破片一二点が出土している。產地毎の内訳は常滑産が六点、在地系が五点、產地不明が一点である。器種は壺・土瓶・皿が出土している。器種組成に目立った偏差は認められない。

土器 破片二五二点、個体一八点の計二七〇点が出土している。器種毎の内訳はカワラケが二三三点（破片二五五点・個体一八点）、瓦質土器（火鉢主体）が一八点（破片のみ）、高台付碗が五点（破片のみ）、擂鉢・内耳土鍋・鉢・鍋・壺各一点（破片のみ）、土師質不明九点（破片のみ）。高台が付く碗は、破片のため全体の器形が明かではなく、管見の限り類例もない。祭祀に伴う供物を載せる器の一種であろうか。

器種はカワラケが総点数の八六%を占める。うち中カワラケが九八点（破片七点、個体一七点、小カワラケが六点（破片五点・個体一点、サイズ不明が一三九点（破片のみ）である。口縁部にススが付着しているものは極めて少ない。神社社殿直下での出土とすることを考えると、大半が祭礼による使用物

施釉土器 破片三点が出土している。内訳は壺が一点、器種不明が二点。水戸市域において施釉土器の出土は管見の限り初めてである。

銅・真鍮製品 個体四点が出土している。器種は煙管吸口一点、幡飾金具二点、環珞一点。祭具が多いのは八幡宮ならではの傾向である。八幡宮では近年まで祭具の一部を拝殿の床下に収納していたとのことであり、実際、出土した幡飾金具はかつて収納していた幡の一部であることが判明した。環珞も近年の祭具の一部であろう。

鉄製品 破片三九点、個体一〇二点の計一四一点が出土している。その全てが和釘と鎌で占められる。発掘調査前に揚屋工事のために床材等の解体が行われており、その際に落下したものが大半とみられる。従って内訳にさしたる意味はないが、和釘には頭巻釘、切釘、合釘等ある程度のバラエティが認められる。

石製品 火打石の破片が三一号遺構から一点出土している。

貝類遺体 クロアワビ二点が埋納遺物として出土している。那珂湊からの水揚げであろうか。一四八一一六・一七。性格等は第五節を参照されたい。

所見 近世の出土遺物は、今次調査の出土总数の三八%を占める。近世からの土地利用の頻度を考えれば、今少し点数が多くてもよいかも知れないが、調査地点が拝殿・幣殿の直下ということを考えれば、そこで生活が営まれていたわけではないので、妥当な点数とも言えよう。修理工事の過程で落下した釘や鎌を除けば、その多くはカワラケで占められることも本地区的特徴である。逆に日常雑器としての磁器・陶器・土器の出土率は少ない。水戸市域の同時期の近世遺物では、水戸藩直営の窯である七面製陶所産の陶磁器類や笠間焼が日常雑器として少なからず認められることが判明しつつあるが、今次調査では一点も認められないことも、本調査区が聖域であるとの特色といえよう。

四 近代～現代の遺物

五 出土銭貨

概要 近代～現代の遺物は三五八点出土している（銭貨を含む）。うち破片が三四点、個体が三二四点である。このうち二点を図示した（銭貨を除く）。なお個体の点数が破片に比べ著しいが、これは銭貨三七点が含まれているためであり、銭貨を抜くと個体は七点となる。以下、種別ごとに内訳を示す。なお銭貨は後述するためここでは対象外とする。

磁器 破片二九点が出土している。器種は碗・皿・鉢・甕・徳利等である。戸市城で多く出土する国民食器は認められなかつた。

陶器 破片四点が出土している。器種は碗・甕・壺蓋等である。

焼締陶器 萬古焼の急須蓋が一点出土している（一四八一七）。

土器 破片五点が出土している。瓦質火鉢・土師質の火鉢七厘等である。なお、本地区における近世のカワラケの高い出土率を思えば、社殿としての土地利用が継続されている近現代においても相当数のカワラケが出土していくに不思議ではない。しかしカワラケ編年が組まれていない中で同定することは難しく、今次調査で出土したカワラケは、ひとまず近世としてカウントしている。したがつて近世のカワラケ二三三点のうち、近代の所産のものも相当数含まれている可能性があることは留意されたい。

近世銭（一文銭） 六七点が出土している。内訳は古寛永が五点、文銭が二点、新寛永が四九点、寛永銭が七点、背元銭が二点、銭種不明が二点である。大半は銭もしくは撒銭として用いられたものと思われるが、器種組成からみて撰銭等の作行為は認められない。

近世銭（四文銭） 二六点が出土している。近世銭貨計九三点中、二八%が四文銭ということになる。内訳は背一一波が五点、寛永銭が八点、文久永宝が一三点である。

近世～現代銭 三三四点が出土している。うち近代銭が八三点、現代銭が二四一点である。なお新一〇円青銅貨のうち、三ツ鱗紋をマジック等で書いているものが四点検出された（一五五一五～一五四）。八幡宮では祭礼等において銭貨に文様を書くような行為は行つていなかったことであり、参拝者による願掛けやまじない等の可能性が高い。

所見 近世～現代の出土遺物は今次調査の出土總数の一三%を占める。近世同様、調査地点が拝殿・幣殿の直下ということを考えれば、そこで生活が営まれていたわけではないので、妥当な点数と言えよう。衣食住に問わる出土品が少ない

ことも、社殿としての本調査区の性格をよく反映している。

概要 四一九点出土している。うち破片は一点のみで、あとは全て個体である。今次調査の特徴を反映する、重要な遺物群と判断したため、一〇八点を図示した。うち、中世～近世銭は図示に耐えられるものは極力図示することとし、近代以降の銭貨は原則として、各種類につき一枚とし、その種類の中で最も古い年号を持つものを掲載することとした。結果、中世～近世銭は八七点、近代銭は二点を図示することができた。以下、種別ごとに内訳を示す。

中世銭（波来銭） 至和元宝・永樂通宝が一点ずつ出土している。I層上面の出土で、周辺の状況から近世の撒銭の一部として使用されたものと思われる。

所見 今次調査で出土した出土銭貨の大半はI層上面に散らばって出土しており、撒銭の痕跡と思われたため、原則として全てをドット上げしている。詳細な調査所見については第五節に委ねたい。

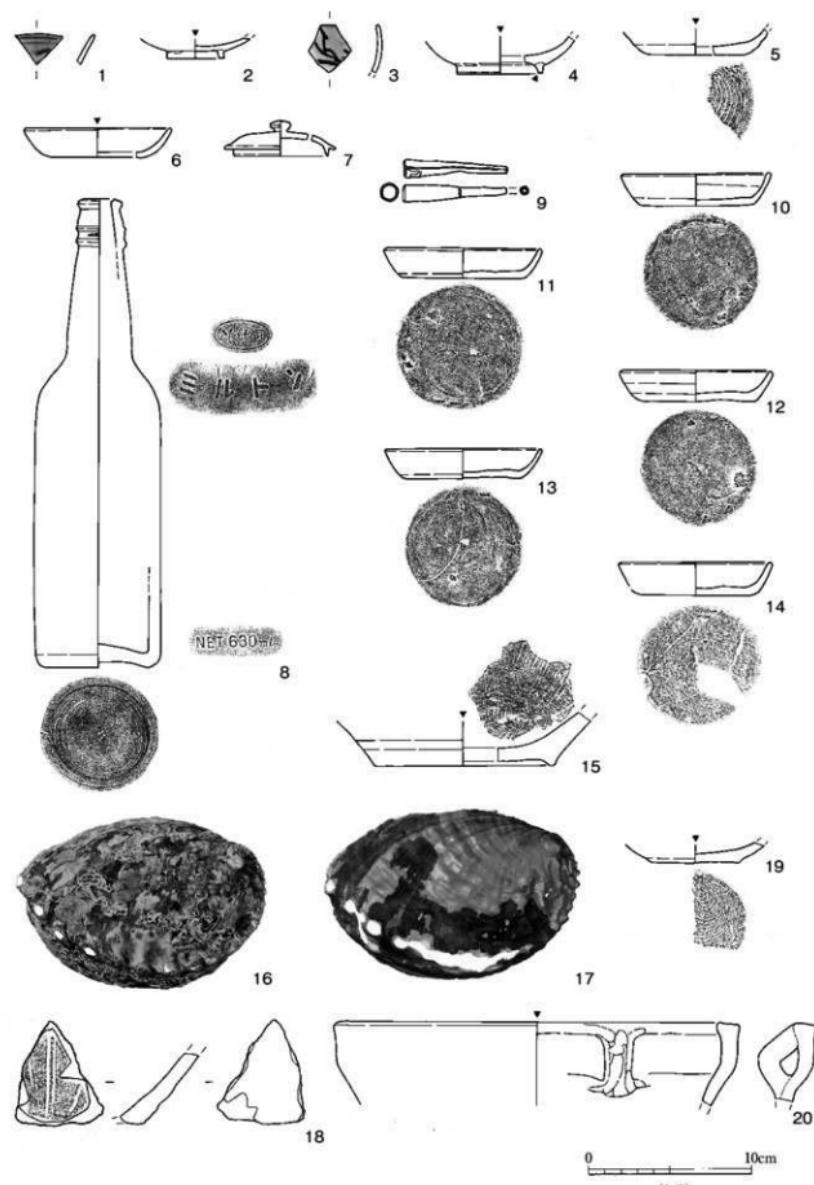
表5 出土遺物観察表

()は復元値。〔 〕は残存値

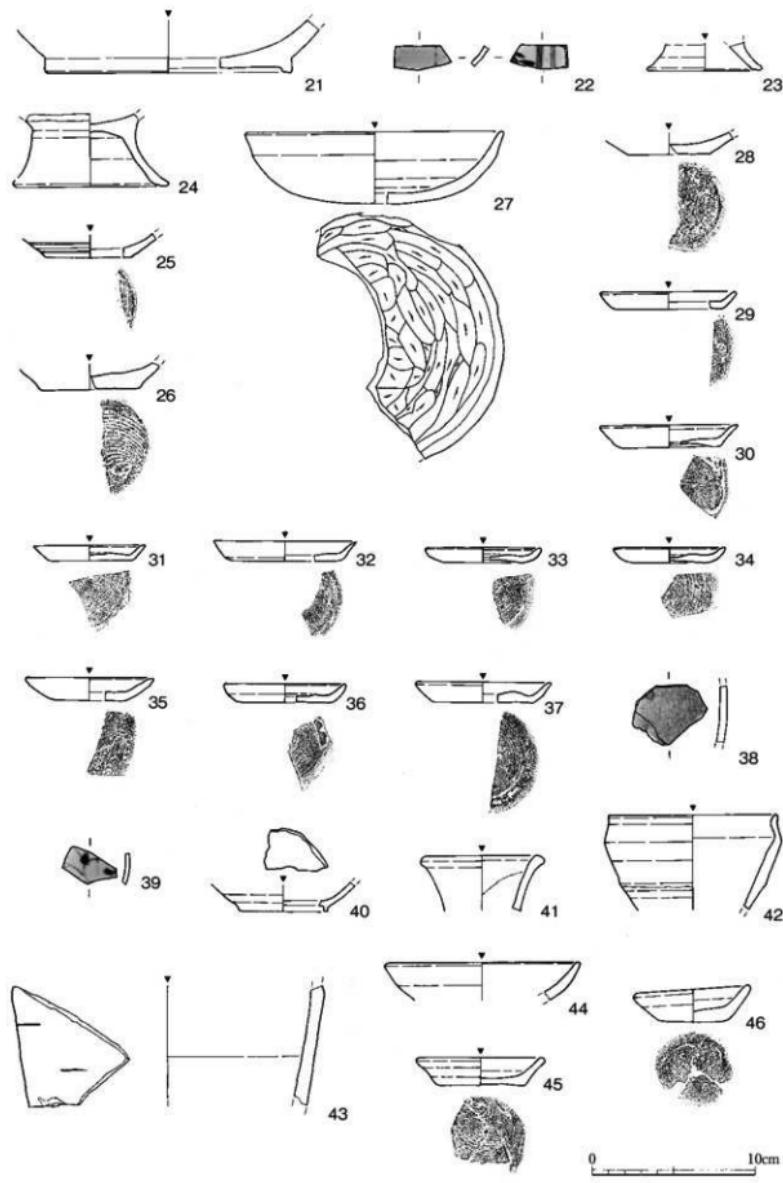
図版 番号	遺物 番号	出土 地点	種別・器種	部位・ 残存値	法量(cm)			重量 (g)	技法・文様・胎土 ・色調・焼成等	推定 生産地	推定年代
					口径	底径	高さ				
1	1号遺構1層	磁器・碗 裏面裏D	口縁部 破片	-	-	[1.8]	2	機織成形・染付・内面口縁部一重巻線、外面 口縁部二重巻線、文様あり	廻戸・美濃系 1840年代～ 1850年代		
2	1号遺構1層	陶器・碗 裏面裏A	底部 破片	-	(3.4)	[1.2]	6	機織成形・透明釉・高台無輪、貫入あり	京都・信楽系 1690年代～ 1850年代		
3	1号遺構1層	陶器・碗 半球瓶	口縁部 破片	-	-	[3.0]	3	機織成形・鉄輪・外面文様あり、貫入あり	京都・信楽系 1680年代～ 1780年代		
4	1号遺構1層	陶器・碗	底部 破片	-	(5.2)	[2.3]	17	機織成形・貼付高台・仄圧・焼付無輪、高台 内面輪、貫入あり	在地系 近世		
5	1号遺構1層	土器・カワラケ 中カワラケ	底部 1/2以下	-	(5.6)	[1.6]	15	機織成形・糸切目・胎土：長石、雲母、黑色 粒子や多量合む／色調内外面：にぶい黄褐色 (10YR5/4) / 焼成良好	在地系 近世		
6	1号遺構3層	土器・カワラケ 中カワラケ	口縁部～底部 1/2以下	(9.0)	(5.8)	1.8	7	機織成形・胎土：赤色・黒色粒子中量合む ／色調内外面：黄褐色(7.5YR8/6) / 焼成良好	在地系 近世		
7	2号遺構	焼削開口 急傾斜	完形	最大径 6.8	受部径 5.7	2.2	31	機織成形・構み貼付・無輪(断泥)	萬古焼か 明治以降		
8	2号遺構	ガラス製品 瓶	完形	2.4	6.6	28.5	552	黒色透明・口板キャップ／体部上面に陽刻 「ミルトン」[Milton]、体部下面に陽刻 「NET630ml」、底部底部割あり		1957年以降	
9	3号遺構 (P20-1層)	煙管・吸口	完形	最大長 6.2	離字径 1.05	0.4	5	青赤付着・灰斑駆除		18世紀以降 吉野郡分田巨頭	
10	4号遺構 (P6)	土器・カワラケ 中カワラケ	完形	9.1	6.9	2.0	54	機織成形・赤底(右)／胎土：長石微量、 黑色粒子中量合む／色調内外面：明黄褐色 (10YR6/6) / 焼成良好	在地系 近世		
11	4号遺構 (P9)	土器・カワラケ 中カワラケ	完形	9.6	7.5	1.9	61	機織成形・赤底(右)／胎土：長石・石英・ 黑色粒子・黒色粒子中量合む／色調内外面： 明黄褐色(10YR6/6) / 焼成良好	在地系 近世		
12	4号遺構 (P10)	土器・カワラケ 中カワラケ	完形	9.2	7.1	1.9	61	機織成形・胎土：青色微量、黑色粒子中量合 む／色調内外面：明黄褐色(10YR6/6) / 焼成良好	在地系 近世		
13	4号遺構 (P20)	土器・カワラケ 中カワラケ	完形	9.5	7.0	1.8	59	機織成形・糸切目・胎土：石英微量、黑色粒 子多量合む／色調内外面：明黄褐色(10YR6/6) / 焼成良好	在地系 近世		
14	4号遺構 (P21)	土器・カワラケ 中カワラケ	完形	(9.4)	(6.8)	2.0	49	機織成形・糸切目・胎土：石英微量、黑色粒 子多量合む／色調内外面：明黄褐色(10YR6/6) / 焼成良好	在地系 近世		
15	4号遺構 (P10)	陶器・擂鉢	底部 破片	-	(11.0)	[2.7]	71	機織成形・削出高台・胎土：石英・長石多量 合む／輪目5本単位か・内面部断端より引き上 げ	在地系 近世		
16	4号遺構 (P10)	貝・アワビ クロアワビ	はね完形	殻長 14.5	殻径 10.5	殻高 3.7	53	逆側で埋納	-	近世	
17	5号遺構 (P4)	貝・アワビ クロアワビ	完形	殻長 14.4	殻径 10.6	殻高 3.6	83	正位で埋納	-	近世	
18	7号遺構-P1	土器・擂鉢	体部下半部 破片	-	-	[4.3]	33	製作成形・胎土：石英・長石・雲母や多量 合む／色調内外面：褐色(SR6/6) / 輪目2 本単位・内底部断端より引き上げ	在地系 近世		
19	7号遺構	土器・カワラケ 中カワラケ	底部 破片	-	(5.4)	[1.1]	24	機織成形・糸切目(右)／胎土：長石・雲母多量、 表面粗面・模様、黒色粒子中量合む／色調 内外面：褐色(7.5YR6/6) / 焼成良好	在地系 近世		
20	8号遺構	土器・鍋 内耳耳鍋	口縁部～体部 破片	(24.6)	-	[5.1]	68	外面調査：指抜後～ラクナ、内面調査：耳點 付後～ラクナ／胎土：石英・長石中量合む／色 調断面：黄褐色(10YR5/6) / 焼成良好／内 面スズ付着審議	在地系 近世		
21	12号遺構	陶器・甕	底部 破片	-	(15.0)	[3.2]	85	機織成形・白泥・見込み目痕1、高台内蛇の目 模様	廻戸・美濃系 近世		
22	13号遺構上面	磁器・鉢 角鉢	体部 破片	-	-	[1.3]	3	機織型打成形・染付・内外面文様あり	肥前系 近世		
23	13号遺構	土器・碗 高台付碗	高台部 破片	-	(7.0)	[1.7]	6	機織成形・胎土：石英・雲母少量合む／色調 内外面：褐色(7.5YR6/6) / 焼成良好	在地系 近世		
24	29号遺構	土器・足高 高台	高台部 1/2以下	-	9.3	(4.4)	136	内外面機織成形・胎土：長石・石英・ 雲母合む／色調内外面：にぶい黄褐色(10YR5/4) / 焼成良好	在地系 10世紀 第2四半期		
25	29号遺構	土器・カワラケ 中カワラケ	底部 破片	-	(5.0)	[1.4]	8	機織成形・糸切目／胎土：長石・石英・ 雲母・海綿状骨針・黒色粒子多量合む／色調 内外面：にぶい黄褐色(10YR4/3) / 焼成良好	在地系 近世		
26	P27	土器・カワラケ 中カワラケ	底部 破片	-	(5.0)	[1.5]	32	機織成形・糸切目・胎土：長石・石英・ 雲母・海綿状骨針・黒色粒子多量合む／色調 内外面：にぶい黄褐色(10YR4/3) / 焼成良好	在地系 近世		

表5 出土遺物観察表(つづき)

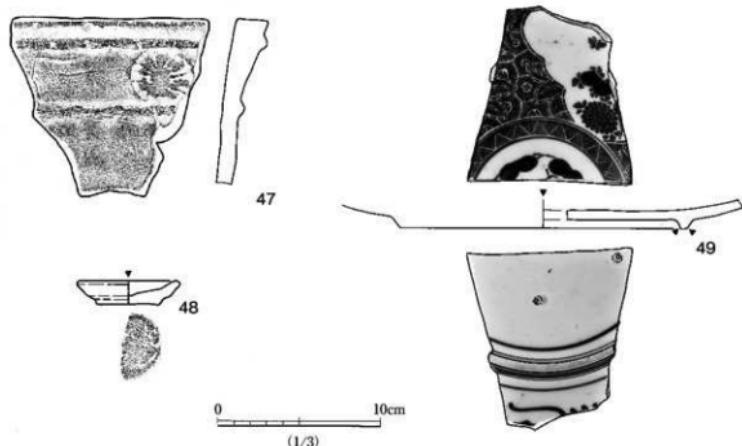
図版番号	遺物番号	出土地点	種別・器種	部位・残存率	法量(cm)			重量(g)	技法・文様・胎土 ・色調・焼成等	推定生産地	推定年代
					口径	底径	高さ				
27	P84	土器器・环	口縁部～底部 1/2以上	(15.6)	-	4.4	185	輪縁成形、外面調整：口縁部横方向のナード調整、外側部～底部までは反時計回りの方角へのラグアズリ調整、口縁部～体部は便りによる黒色處理、内面著調整：横方向のナード調整後、底面にによる黒色處理 胎土：長石・石英・海綿状骨針・赤色粒子微量含む／色調内外面にぶい黄褐色(10YR7/4) / 焼成良好	在地系	7世紀後葉	
28	P98	土器・カワラケ 中カラワケ	底部 破片	-	(5.0)	[1.3]	26	輪縁成形、系切底／胎土：雲母多量、黑色粒子・石英微量含む／色調内外面：橙色(7.5YR7/6) / 焼成良好	在地系	近世	
29	I層上面	土器・カワラケ 中カラワケ	口縁部～底部 破片	(8.0)	(6.6)	1.1	5	輪縁成形、系切底／胎土：黑色粒子微量含む／色調内外面：橙色(7.5YR7/6) / 焼成良好	在地系	近世	
30	I層上面	土器・カワラケ 中カラワケ	口縁部～底部 破片	(8.2)	(6.0)	1.3	8	輪縁成形、系切底／胎土：黑色粒子・赤色粒子微量含む／色調内外面：明黄褐色(10YR7/6) / 焼成良好	在地系	近世	
31	I層上面	土器・カワラケ 小カラワケ	口縁部～底部 破片	(6.8)	(5.0)	0.9	6	輪縁成形、系切底／胎土：黑色粒子・赤色粒子微量含む／色調内外面：橙色(7.5YR7/6) / 焼成良好	在地系	近世	
32	I層上面	土器・カワラケ 中カラワケ	口縁部～底部 破片	(8.6)	(6.4)	1.2	6	輪縁成形、系切底／胎土：黑色粒子・赤色粒子少量含む／色調内外面にぶい黄褐色(10YR6/4) / 焼成良好	在地系	近世	
33	I層上面	土器・カワラケ 小カラワケ	口縁部～底部 破片	(7.0)	(4.8)	0.9	6	輪縁成形、系切底／胎土：黑色粒子・赤色粒子微量含む／色調内外面にぶい黄褐色(10YR7/4) / 焼成良好	在地系	近世	
34	I層上面	土器・カワラケ 小カラワケ	口縁部～底部 破片	(6.8)	(4.8)	0.9	6	輪縁成形、系切底／胎土：黑色粒子・赤色粒子微量含む／色調内外面：明黄褐色(10YR7/6) / 焼成良好	在地系	近世	
35	I層上面	土器・カワラケ 中カラワケ	口縁部～底部 破片	(7.8)	(4.5)	1.4	8	輪縁成形／胎土：雲母・黑色粒子微量含む／色調内外面：明黄褐色(10YR6/6) / 焼成良好	在地系	近世	
36	I層上面	土器・カワラケ 中カラワケ	口縁部～底部 破片	(7.4)	(5.8)	1.1	6	輪縁成形、系切底／胎土：黑色粒子微量含む／色調内外面：明黄褐色(10YR7/6) / 焼成良好	在地系	近世	
37	I層上面	土器・カワラケ 中カラワケ	口縁部～底部 1/2以下	(8.2)	(6.2)	1.2	14	輪縁成形、系切底／胎土：黑色粒子・赤色粒子少量含む／色調内外面にぶい橙色(7.5YR7/4) / 焼成良好	在地系	近世	
38	A区Ⅱ層上面	磁器・碗	体部 破片	-	-	[3.5]	10	輪縁成形・染付／内面文様あり／貢入あり	在地系	近世	
39	A区Ⅱ層上面	磁器・碗 半球碗 AorB	体部 破片	-	(5.4)	[1.6]	7	輪縁成形・染付／外面「花唐草文」	肥前系	1700年代～ 1860年代	
40	A区Ⅱ層上面	磁器・鉢	底部 破片	-	-	[2.0]	3	輪縁成形・貼付高台・染付・豊作無袖／見込 二重輪廻・波文	肥前系	近世	
41	A区Ⅱ層上面	磁器・壺	口縁部 破片	(7.2)	-	[3.4]	13	輪縁成形・白土化性質に染付／口縁部砂付着、外側口縁部一重輪廻・草花文	在地系	近世	
42	A区Ⅱ層上面	陶器・碗 天目茶碗	口縁部～体部 破片	(10.2)	-	[5.8]	21	輪縁成形・鉢形、外側部下半は露胎／胎土：青灰色で硬質／内面下部に擦痕あり	瀬戸・美濃系	17世紀前半～ 後半	
43	A区Ⅱ層上面	陶器・半削型壺	体部 破片	-	(17.0)	[7.3]	87	輪縁成形・鉢形	瀬戸・美濃系	近世	
44	A区Ⅱ層上面	土器・カワラケ 中カラワケ	口縁部 破片	(12.0)	-	[2.3]	11	輪縁成形／胎土：雲母多量、黑色粒子・石英微量含む／色調内外面：橙色(7.5YR6/6) / 焼成良好	在地系	近世	
45	A区Ⅱ層上面	土器・カワラケ 小カラワケ	口縁部～底部 1/2以上	(7.6)	(5.4)	1.7	19	輪縁成形・系切底(右)／胎土：赤色粒子多量、雲母・黑色粒子微量含む／色調内外面：橙色(7.5YR7/6) / 焼成良好	在地系	近世	
46	A区Ⅱ層上面	土器・カワラケ 小カラワケ	口縁部～底部 ほぼ完形	6.8	4.0	2.2	43	輪縁成形・胎土：雲母多量、黑色粒子多量、石英微量含む／色調内外面：橙色(7.5YR7/6) / 焼成良好	在地系	近世	
47	A区Ⅱ層上面	土器・丸火鉢 瓦質	口縁部 破片	-	-	[10.2]	224	輪縁成形／外側口縁部に二重の隆起縦文貼付、スタンプ「菊文」	在地系	近世	
48	表探	土器・カワラケ 小カラワケ	口縁部～底部 1/2以下	(6.2)	(3.8)	1.4	17	輪縁成形・系切底(左)／胎土：赤色粒子多量、雲母・黑色粒子微量含む／色調内外面にぶい橙色(7.5YR7/4) / 焼成良好	在地系	近世	
49	表探	磁器・墨 墨型紙滑結墨	体部～底部 破片	-	(17.6)	[1.6]	114	輪縁成形・墨型紙給付・豊作無袖／外側腰部唐草文・一重輪廻・高台點三重輪廻・高台内側一面連續等巻文・内面連續等巻文に忍持・瓶に牡丹文・花卉文・高台内側2箇所保存	不明	1880年代～ 1890年代	



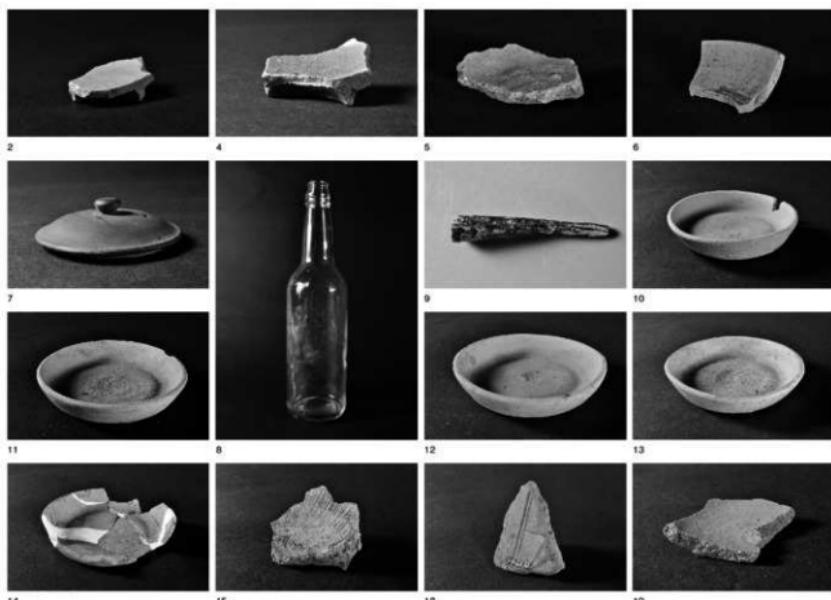
148 出土遺物実測図 (1)



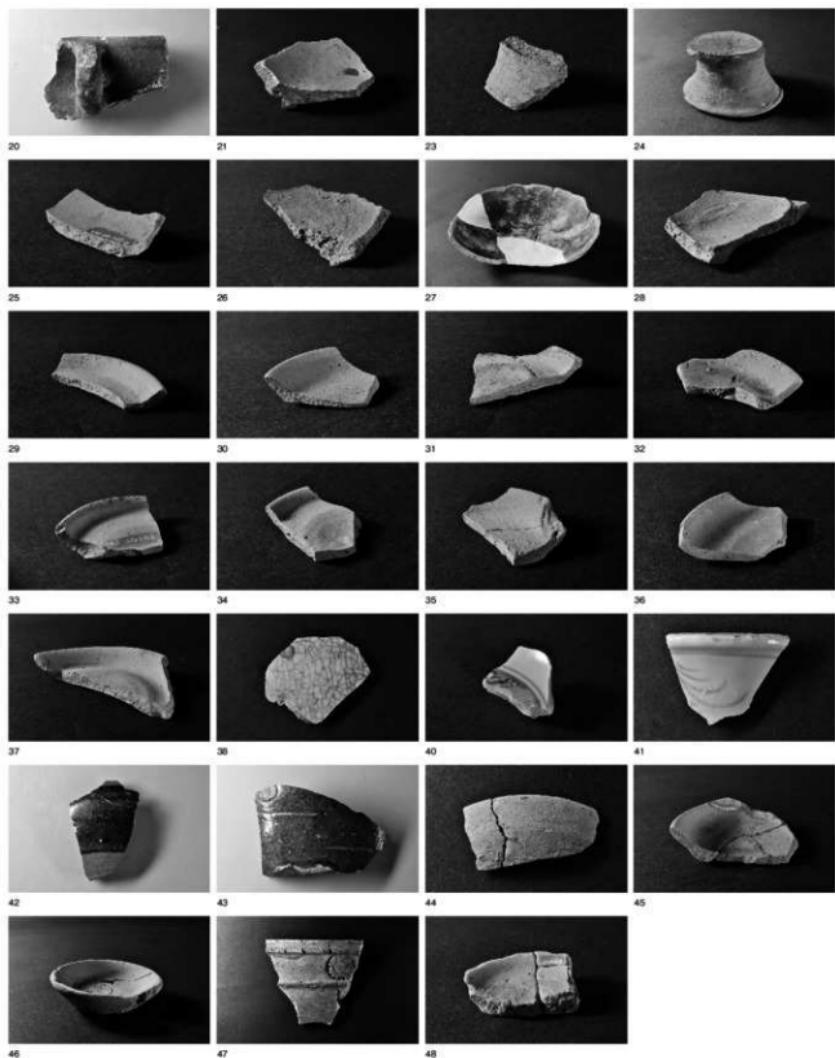
149 出土遺物実測図 (2)



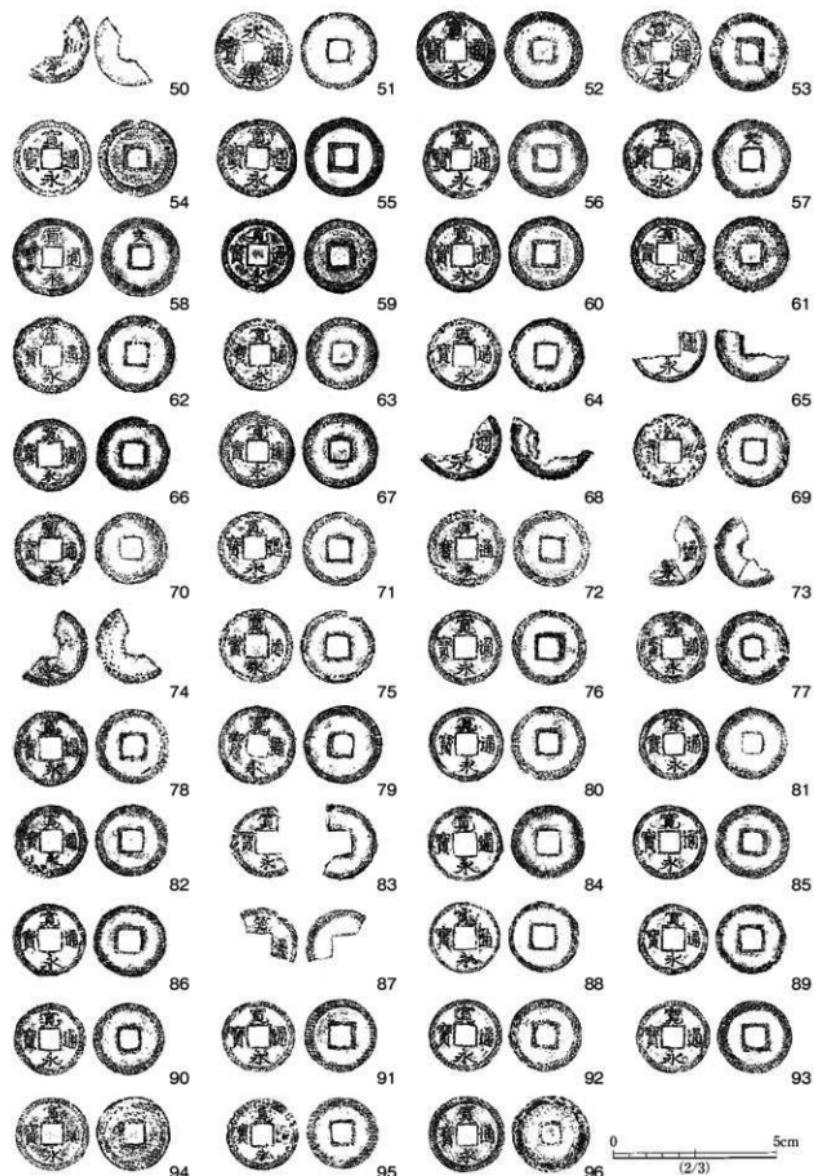
150 出土遺物実測図 (3)



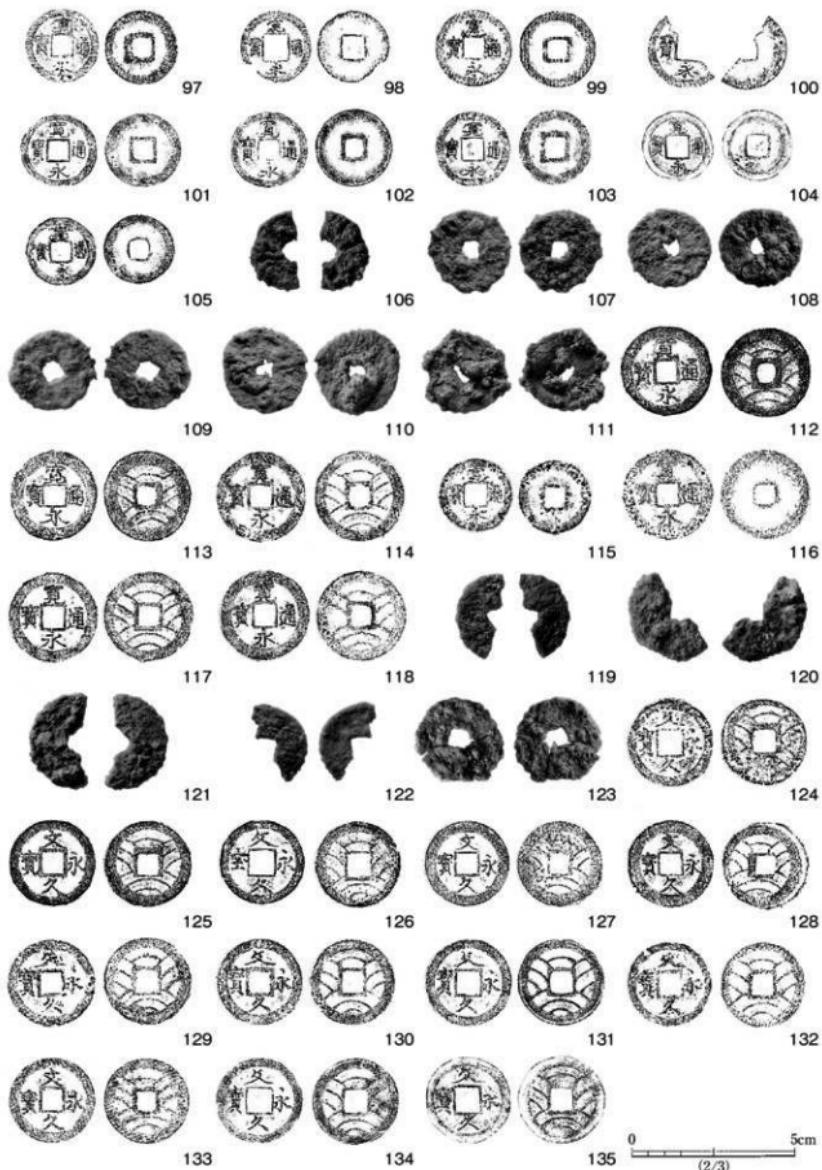
151 出土遺物写真 (1)



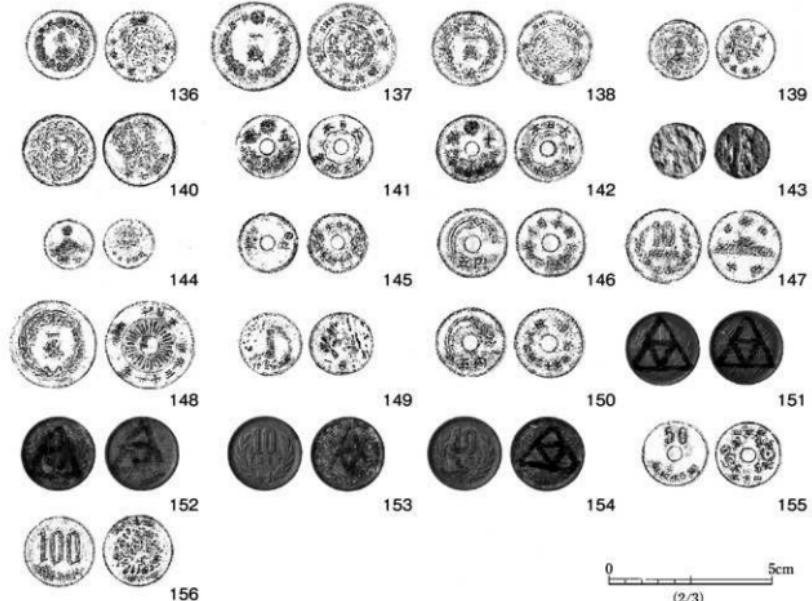
152 出土遺物写真 (2)



153 出土遺物実測図 (4)



154 出土遺物実測図 (5)



155 出土遺物実測図 (6)

表 6 出土遺物観察表 (銭貨)

回版 番号	出土地点	銭名・銭種	分類	法面 (cm)		重量 (g)	初鑄年 (近代銭は鋳造年)	備考
				外径	穿孔			
50	I層上面	至和元宝	流朱銭	-	-	0.1	1	1054 (北宋至和元年) 完形／ドットNo.57
51	I層上面	永泰通宝	流朱銭	24	0.6	0.1	3	1048 (永泰6年) 完形／ドットNo.388／模鉄小
52	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	古寛永	25	0.6	0.1	4	1636 (寛永13年) 完形／ドットNo.356
53	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	古寛永	25	0.6	0.1	4	1636 (寛永13年) 完形／ドットNo.366
54	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	古寛永	24	0.6	0.1	3	1636 (寛永13年) 完形／ドットNo.374
55	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	古寛永	24	0.6	0.1	4	1636 (寛永13年) 完形／ドットNo.14
56	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	古寛永	24	0.6	0.1	4	1636 (寛永13年) 完形／ドットNo.389
57	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	文銭	25	0.6	0.1	4	1668 (寛文8年) 完形／ドットNo.134／江戸亀戸で鋳造
58	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	文銭	25	0.6	0.1	3	1668 (寛文8年) 完形／ドットNo.402／江戸亀戸で鋳造
59	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.7	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.8
60	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.9
61	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.14／江戸亀戸で鋳造
62	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	24	0.6	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.22
63	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	22	0.6	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.23
64	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.26
65	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	-	0.7	0.1	1	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.27
66	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.7	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.29
67	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.30
68	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	25	-	0.1	1	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.31
69	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	22	0.6	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.34
70	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	22	0.7	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.62
71	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.63
72	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.64
73	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	-	0.6	0.1	1	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.65
74	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	24	0.6	0.1	1	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.66
75	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.7	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.69
76	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.7	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.99
77	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	22	0.6	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.100
78	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.115
79	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	24	0.6	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.116
80	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	23	0.7	0.1	3	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.118
81	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	22	0.6	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.123
82	I層上面	寛永通宝 (銀一文銭)	新寛永	22	0.6	0.1	2	1697 (元禄10年) 完形／ドットNo.124

表 6 出土遺物観察表(銭貨づき)

団版 番号	出土地点	銘名・類種	分類	法量(cm)			重量(g) (近代鉄は鋳造年)	初跡年 (近代鉄は鋳造年)	備考
				外径	内径	厚			
83	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	22	0.7	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.126
84	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.7	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.143
85	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.146
86	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	22	0.7	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.316
87	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	-	0.6	0.1	1	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.317
88	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.7	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.322
89	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	22	0.7	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.322
90	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	22	0.6	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.344
91	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.348
92	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.351
93	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.352
94	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.353
95	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	22	0.6	0.1	3	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.354
96	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	24	0.6	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.359
97	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.6	0.1	3	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.365
98	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	22	0.8	0.1	1	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.375
99	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	24	0.6	0.1	3	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.388
100	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	25	0.6	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.390
101	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	24	0.6	0.1	4	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.391
102	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	24	0.6	0.1	4	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.392
103	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	23	0.7	0.1	3	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.405
104	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	背元銭	22	0.6	0.1	2	1741(寛保元)年	完形/大阪高島で発見
105	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	背元銭	22	0.7	0.1	2	1741(寛保元)年	完形/大阪高島で発見
106	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	背元銭	2	0.7	0.2	2	1739(元文4)年	完形/ドットNo.88/銭種は法量による推定
107	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	背元銭	24	0.5	0.2	4	1739(元文4)年	完形/ドットNo.141/銭種は法量による推定
108	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	背元銭	25	0.5	0.2	4	1739(元文4)年	完形/ドットNo.142/銭種は法量による推定
109	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	背元銭	25	0.6	0.2	4	1739(元文4)年	完形/ドットNo.328/銭種は法量による推定
110	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	背元銭	25	0.6	0.2	5	1739(元文4)年	完形/ドットNo.360/銭種は法量による推定
111	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	背元銭	24	0.6	0.2	5	1739(元文4)年	完形/ドットNo.380/銭種は法量による推定
112	I層上面	寛永通宝(真銅四文銭)	背11渡	28	0.6	0.1	5	1769(明和6)年	完形/ドットNo.17
113	I層上面	寛永通宝(真銅四文銭)	背11渡	23	0.6	0.1	4	1769(明和6)年	完形/ドットNo.40
114	I層上面	寛永通宝(真銅四文銭)	背11渡	28	0.6	0.1	5	1769(明和6)年	完形/ドットNo.139
115	I層上面	寛永通宝(銅一文銭)	新寛永	22	0.7	0.1	2	1697(元禄10)年	完形/ドットNo.18
116	I層上面	寛永通宝(銅四文銭)	背11渡	28	0.6	0.1	5	1769(明和6)年	完形/ドットNo.79
117	I層上面	寛永通宝(銅四文銭)	背11渡	28	0.6	0.1	5	1769(明和6)年	完形/ドットNo.114
118	I層上面	寛永通宝(銅四文銭)	背11渡	28	0.6	0.1	5	1769(明和6)年	完形/ドットNo.138
119	I層上面	寛永通宝(銅四文銭)	-	-	0.2	0.2	2	1866(慶応2)年	完形/ドットNo.25/銭種は法量による推定
120	I層上面	寛永通宝(銅四文銭)	-	29	0.5	0.2	4	1866(慶応2)年	完形/ドットNo.112/銭種は法量による推定
121	I層上面	寛永通宝(銅四文銭)	-	29	0.3	0.4	2	1866(慶応2)年	完形/ドットNo.122/銭種は法量による推定
122	I層上面	寛永通宝(銅四文銭)	-	27	0.6	0.2	2	1866(慶応2)年	完形/ドットNo.350/銭種は法量による推定
123	I層上面	寛永通宝(銅四文銭)	-	27	0.6	0.2	3	1866(慶応2)年	完形/ドットNo.387/銭種は法量による推定
124	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.7	0.1	4	1863(文久3)年	完形/ドットNo.6
125	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.7	0.1	3	1863(文久3)年	完形/ドットNo.15
126	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	26	0.8	0.1	3	1863(文久3)年	完形/ドットNo.16
127	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.7	0.1	3	1863(文久3)年	完形/ドットNo.33
128	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.6	0.1	4	1863(文久3)年	完形/ドットNo.38
129	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.6	0.1	3	1863(文久3)年	完形/ドットNo.54
130	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	26	0.6	0.1	3	1863(文久3)年	完形/ドットNo.60
131	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.7	0.1	4	1863(文久3)年	完形/ドットNo.131
132	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	26	0.6	0.1	3	1863(文久3)年	完形/ドットNo.138
133	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.6	0.1	4	1863(文久3)年	完形/ドットNo.361
134	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.7	0.1	4	1863(文久3)年	完形/ドットNo.39
135	I層上面	文久永宝(銅四文銭)	-	27	0.7	0.1	3	1863(文久3)年	完形/ドットNo.40
136	I層上面	半錢銅貨	近代銭	22	-	0.2	4	1873(明治6)年	完形/ドットNo.36
137	I層上面	電1銭銅貨	近代銭	28	-	0.2	7	1883(明治16)年	完形/ドットNo.140
138	I層上面	朝鮮貨幣1銭銅貨	近代銭	24	-	0.1	4	1908(露熙2)年	完形/ドットNo.132
139	I層上面	五厘青銅貨	近代銭	19	-	0.1	2	1916(大正5)年	完形/ドットNo.77
140	I層上面	1銭1銭銅貨	近代銭	23	-	0.1	4	1918(大正7)年	完形/ドットNo.20
141	I層上面	大正5銭白銅貨	近代銭	22	0.4	0.2	4	1920(大正9)年	完形/ドットNo.408
142	I層上面	10銭白銅貨	近代銭	22	0.4	0.1	4	1921(大正10)年	完形/ドットNo.24
143	I層上面	カラス1銭アルミ貨	近代銭	17	-	0.1	1	1930(昭和13)年	完形/ドットNo.323
144	I層上面	富士1銭アルミ貨	近代銭	16	-	0.1	1	1941(昭和16)年	完形/ドットNo.107
145	I層上面	5銭アルミ青銅貨	近代銭	19	0.4	0.1	3	1938(昭和13)年	完形/ドットNo.50
146	I層上面	旧5円青銅貨	近代銭	22	0.5	0.1	3	1950(昭和25)年	完形/ドットNo.85
147	I層上面	旧10円青銅貨	近代銭	28	-	0.1	4	1961(昭和26)年	完形/ドットNo.191
148	I層上面	昭1銭青銅貨	近代銭	28	-	0.2	8	1966(昭和31)年	完形/ドットNo.323
149	I層上面	1円アルミ貨	現代銭	2	-	0.1	1	1960(昭和35)年	完形/ドットNo.404
150	I層上面	新5円青銅貨	現代銭	22	0.5	0.1	3	1962(昭和37)年	完形/ドットNo.296
151	I層上面	新10円青銅貨	現代銭	23	-	0.1	5	1974(昭和49)年	完形/ドットNo.61/両面に「三つ鱗」紋
152	I層上面	新10円青銅貨	現代銭	24	-	0.1	5	1975(昭和50)年	完形/ドットNo.349/両面に「三つ鱗」紋
153	I層上面	新10円青銅貨	現代銭	23	-	0.1	4	1986(平成10)年	完形/ドットNo.4/両面に「三つ鱗」紋
154	I層上面	新10円青銅貨	現代銭	23	-	0.1	4	2000(平成12)年	完形/ドットNo.315/両面に「三つ鱗」紋
155	I層上面	50円白銅貨	現代銭	21	0.4	0.2	4	1970(昭和45)年	完形/ドットNo.171
156	I層上面	100円白銅貨(板)	現代銭	22	-	0.1	4	1967(昭和42)年	完形/ドットNo.207

表7 出土遺物一覧表

出土地点	出土遺物	調査						調査 部
		東・平 原	西・平 原	中世	近世	近・現代	不明	
土御部	器物不明	7					7	
石器	把頭系 扇形網D		1		1			
石器	把頭系 乳頭網小	1			1			
京	京 瓢箪 扇形網	2		2				
京	京 瓢箪 扇形網	1		1				
陶器	瓶 扁瓶 扇形網	1		1				
陶器	瓶 扁瓶 扇形網	3	1	4				
1号遺構1層	中カワチ	2		2				
土器	カワチ (キイズ不明)	19	19					
土器	土御賀 錐	1		1				
土器	土御賀 器物不明	3	8	11				
瓦	瓦 東宝 (既・瓦頭)	1		1				
瓦	瓦 東宝 (既・瓦頭)	1		1				
瓦	ハガマリ		1					
瓦	シジミ		1	1				
瓦	二枚片		10	10				
瓦	小明		27	27				
織文土器	網目扇形文	1		1				
織文土器	網目扇形文	1		1				
組合部	环	1		1				
土御部	器物不明	3		3				
1号遺構3層	中カワチ	1		1				
土器	土御賀 器物不明	8	8	10				
石器	把頭系 網	1		1				
1号遺構下層	土御賀 器物不明	1		1				
1号遺構	土器	土御賀 器物不明	1	1				
1号遺構	土器	土御賀 器物不明	1	1				
1号遺構+2号	土器	土御賀 器物不明	5	5				
石器	近代 扇網	1		1				
使用陶器	萬字洗 忽須蓋		1	1				
2号遺構	土器	土御賀 七厘	1	1				
2号遺構	土器	土御賀 大津か	1	1				
2号遺構	研製品	9	1	10				
2号遺構	プラスチック	1		1				
3号遺構(F9)	土器	土御賀 器物不明		1	1			
3号遺構(F17)	土器	土御賀 美	1		1			
3号遺構(F20)	土器	カワチ (キイズ不明)	1		1			
3号遺構(F20)	陶製品	網目扇形	1		1			
3号遺構(F30)	貝	不明		2	2			
3号遺構(F30)	土御部	环 内高	1		1			
3号遺構(F34)1組	土器	カワチ (キイズ不明)	2		2			
4号遺構(F9)	土器	中カワチ	1		1			
4号遺構(F9)1組	土器	網目扇形	1		1			
4号遺構(F9)	土器	中カワチ	1		1			
4号遺構(F9)	土器	網目扇形	1	1	2			
4号遺構(F9)1組	土器	和封 (堅式不明)	2		2			
4号遺構(F9)	土器	中カワチ	1		1			
4号遺構(F9)	土器	土御賀 器物不明	1		1			
4号遺構(F9)	土器	網目扇形	2	1	3			
4号遺構(F9)	土器	和封	1		1			
4号遺構(F9)	陶製品	和封 (堅式不明)	4		4			
4号遺構(F9)	貝	アワビ	1		1			
4号遺構(F9)	土器	中カワチ	1		1			
4号遺構(F9)	土器	中カワチ	1		1			
4号遺構(F9)2組	土器	和封 (堅式不明)	3		3			
5号遺構	瓶	2		2				
土御部	器物不明	2		2				
5号遺構(F4)	土器	中カワチ	2		2			
5号遺構(F5)	土器	土御賀 器物不明	1		1			
5号遺構	貝	3	3	3				
5号遺構(F4)	土器	半球網 瓢箪	1		1			
5号遺構	土器	瓶 扁瓶	1		1			
5号遺構(F3)	土器	器物不明	4		4			
5号遺構	土器	カワチ (キイズ不明)	2		2			
5号遺構	土器	环	1		1			
6号遺構(F2)	土器	器物不明	1		1			
6号遺構	土器	美	1		1			

出土地点	出土遺物	調査						総計
		新石器時代	縄文時代	古墳時代	中世	近世	近・現代	
1層上面	銅鏡	100円白銅貨(板)				22	32	
	500円白銅貨			1	1			
	在地名 角添		1	1				
	器物 不明		1	1				
	近代 銅軸錠		1	1				
	陶器		1	1				
	器物 不明		1	1				
	カツラ (サイズ不明)	5			5			
	土師質 器物不明			2	2			
A区I-1層上部	土器	カツラ (サイズ不明)	3		3			
	土師質 角丸鉢		1	1				
	瓦 瓦大鉢		1	1				
	土師質 器物不明		5	5				
	目	ハゲアリ合		1	1			
		二枚貝		1	1			
B区E-1層	土器	环 内面	1		1			
		器物 不明	1		1			
	カツラ (サイズ不明)	6		6				
	土師質 器物不明		2	2				
	目	シジミ	1	1				
A区II-1層上部	土器	側面 二口式	1		1			
		側面 田口下式	3		3			
		側面 江戸文系	3		3			
		側面 有字衣文系	2		2			
		側面 半周 or 圆周	1		1			
	組合せ	器物 不明	1		1			
		高台形 内面	1		1			
		器物 不明 内面	1		1			
	土器	器物 不明	5		5			
		环 内面	1		1			
		环	1		1			
A区Ⅲ層上	組合せ	在地名 瓶	1		1			
	陶器	器物 不明	1		1			
	器物	器物 不明	1		1			
	土器	カツラ (サイズ不明)	7		7			
		土師質 器物不明		24	24			
	鉄製品	和鉄 (型式不明)	1		1			
	器物	器物 不明		1	1			
C区屋上層	土器	カツラ (サイズ不明)	4		4			
		側面 片縫舟文系	1		1			
	純文土器	側面 圓周式	2		2			
		器皿 不明	1		1			
	組合せ	环	1		1			
		器物 不明	7		7			
		环 内面	5		5			
	土器	环	2		2			
		重	1		1			
		把柄部 手取鉢 Aozu	1		1			
	組合せ	把柄部 路	1		1			
		把柄部 俗種	1		1			
		瓶・先付・手取鉢	1		1			
		瓶・先付 俗種不明	1		1			
	陶器	在地名 逆利	1		1			
		瓶・先付 天文茶碗	1		1			
		瓶・先付 瓶	1		1			
		在地名 瓶	1		1			
	陶器	在地名 俗種	1		1			
		瓶・先付 俗種無	1		1			
		瓶・先付 俗種不明	1		1			
		在地名 器物不明	1		1			
	焼締陶器	空活底 大盤	6		6			
		中ガワラフ	18		18			
		小ガワラフ	4		4			
		カツラ (サイズ不明)	5		5			
	土器	瓦 口付瓶	1		1			
		瓦 瓦	1		1			
		土師質 器物不明	96	96				
		瓦 瓦 器物不明	10	10				
	純文土器	器皿 不明	1		1			
	鉄製品	鐵舟	3		3			
		和鉄 (型式不明)	5		5			
	石製品	石器質 版棒 不明		11	11			
	目	カキ		8	8			
		ハゲアリ合		1	1			
		シジミ		1	1			
		小網		3	3			

表7 出土遺物一覧表（つづき）

第五節 水戸八幡宮の考古学的考察

一 はじめに

水戸八幡宮は文禄元（一五九二）年、佐竹義宣が水府總鎮守として馬場八幡宮（常陸太田市）の分靈を勧請し、水戸城中大坂横宿（現北見町）に創祠した。義宣は根拠地を太田から水戸に移し、文禄二（一五九三）年に行つた大規模普請は近世水戸城・城下町の原型を築いたといわれ、水戸八幡宮は近世水戸の創始とともに、幾星霜を重ねてきたことになる。

水戸徳川家の治世では二代光圀による社寺整理により移転を余儀なくされても再遷座を果たし、以後八幡町の地にあって水戸士民の信仰を集めってきた。八幡町は水戸城惣構の北西端に位置しており、地理的にみて重要な場所であったことが窺えるが、藩庁と八幡宮の関係は特段緊密であつたとは言い難く、とくに近世後期以降、藩内で繰り広げられた事件史とはほぼ無縁であつた。八幡宮は佐竹氏以来の由緒を持つ神社として朱印三〇石を代々与えられ、藩内有数の神社として純粹に神事を行うことで、その存在感を示してきたと言つてよい。

このような八幡宮の歴史については、これまで文献史料を中心に叙述されてきたが、今般拜殿及び拝殿の直下を発掘したことにより、考古学的方法論から八幡宮の来歴を検討する機会が与えられた。前節までに報告した遺構・遺物はその基盤をなすものであり、本節では前節までの事実報告を総合的に検証し、八幡宮史の諸相を考古学的に繰くこととした。

二 水戸八幡宮と拜殿の社史

水戸八幡宮の社史については福士祐一（一九九九）に詳しい。社史は今次調査成

果の解釈に欠かせぬ知見であるため、考古学的所見を述べる前に、まず同文献をもとに、水戸八幡宮と拜殿の建設および修復にかかる記事を簡単に確認しておこう。

創祠 水戸八幡宮の創祠は文禄元（一五九二）年に遡る。水戸城下の大坂横宿（現水戸市北見町）に、佐竹氏の水府總鎮守として創祀された。現在の本殿（国指定建造物）はこの大坂横宿に八幡宮があつた慶長三（一五九八）年に建立されたものである。

遷座 元禄七（一六九四）年、二代藩主徳川光圀の社寺改革に伴い、八幡宮は那珂西村（現城里町那珂西神社）に移転・遷座となつた。

再遷座 宝永六（一七〇九）年、城下町人の請願等が叶い、水戸八幡宮は現在地（水戸市八幡町）に再遷座された。なお再遷座に際しては、既に宝永三（一七〇六）年には仮殿が造営され、御神体が遷座されていたという。また同地は遷座以前は寺院地であり、本法寺・本行寺（天和三（一六八三）年に移転）、蓮乗寺（天和年間に移転）の三寺があつた。

拜殿再建 安永四（一七七五）年、拜殿の再建が行われ、現在の社殿の全容が整つた。『水府寺社便覧』の記事（「今の大拜殿は安永年間古きを毀ち吉田明神の拜殿の式に習ひて造立せり、この時大工弥惣次といふもの、棟梁として造営なる」）等の考証から、この安永四年の再建拜殿が現行拜殿であると推測されている。拜殿が再建された理由は詳らかではないが、先の記事に「古きを毀ち」とあることから、火災等の理由ではなく、老朽化に伴うものと考えるのが妥当と考えられる。

前身拜殿について 安永四以前（拜殿が再建される以前）に造立されていた前身拜殿の規模に関しては、「鎮守帳」（公益財團法人徳川ミュージアム蔵）『水府寺社便覧』（国立国会図書館蔵）に「拜殿 長四間 横二間半」と記載されてい。また「前殿 長六間 横二間半」とも併記されており、拜殿とともに「前

殿」と呼ばれる建物があつたことが推測される。

なお「鎮守帳」「水府寺社便覽」の拝殿・前殿の記録については、現在地に移転した時の記録なのか、あるいは創建時代の記録なのかについて判然としていない。

本記録は拝殿の来歴を知る上での数少ない文字史料であることから、改めて史料批判を行う必要がある。

再建拝殿の修理記録

拝殿はその後文化一〇（一八一三）年に修理、弘化三（一八四六）年に屋根葺替、明治三一（一八九八）年に修理、大正七（一九一八）年に修理、大正一〇（一九二一）年に屋根葺替（銅板）等の修理記録がある。

三 発掘成果からみた近世以降の土地利用の変遷

今次調査ではローム層上面、Ⅲ層上面、I層上面の三面にわたる遺構確認面が検出され、少なくとも三時期の土地利用があつたことは疑いない。さらに各遺構の分布や切り合の状況等をみると、ローム層上面で二時期、Ⅲ層上面で三時期に細分することができた。すなわち考古学的所見からは、六時期に及ぶ土地利用が窺えるわけである。そこで本項では六時期の土地利用をⅠ期～VI期として区分し、前項で確認した社史を参考しながら、土地利用の変遷を叙述していこう。

なお、本項で述べる土地利用の変遷は、遺構が検出され、具体的な論拠を提示できる近世以降を対象としている。しかしながら前節で報告したように、今次調査では縄文時代および平安時代のまとまった遺物が出土していることから、調査地区周辺で同時代の土地利用があつた可能性が高いことは強調しておきたい。縄文・古代の土地利用の実像は、茨城高等学校遺跡をめぐる今後の課題と言えよう。

(一) 第一期～八幡宮遷座以前の時代①

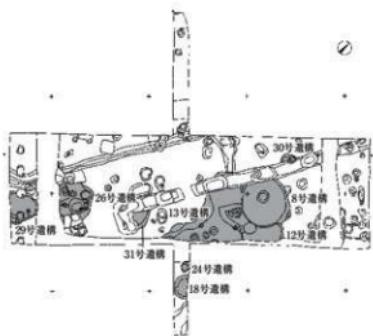
ローム層上面を確認面とし、八号・一二号・一三号遺構を指標とする遺構群である（一五六）。時期は八幡宮が当地に再遷座する宝永三（一七〇六）年以前である。具体的な年代比定に叶う遺物はほとんどないが、一六一～四五・四六のカワラケは一七世紀前葉の所産とみられることから（本節五参照）、ひとまず一七世紀前半として考えたい。

遺構の展開状況は、掘立柱建物跡などの明確な建物跡や、溝等の土地を区画する施設は確認されず、不定形の土坑が複雑に切り合う様相を呈する。一見活発な土地利用がなされたようにも見えるが、遺構・ピット・確認面からはさほど多くの遺物は確認されず、また性格を窺うような遺物も見あたらない。遺構の中で性格が判明するのは八号遺構である。八号遺構は植栽痕で、掘形の形状から抜き取り痕とみられる。直径からすると比較的大振りの樹木が植わっていたものと考えられる。またその隣で複雑に切り合う一二号遺構や一三号遺構も根穴と思われる凹凸がみられることから、八号遺構と同様に植栽關係の土坑である可能性が高い。やや離れるが二六号遺構も植栽痕と見なしてよいだろう。さらにこれらの遺構の周囲に散在するピットについても、土層断面からも掘形の形狀からも柱穴と断言できるものはわずかであり、その多くは根穴や小振りの植栽痕として認識される。

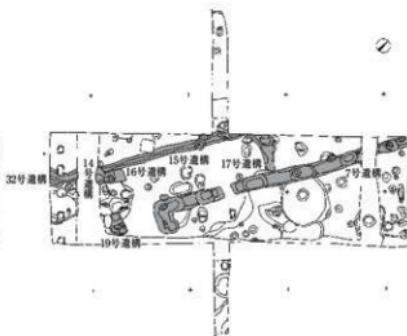
したがって第一期は、明確な建物や区画溝が存在せず、大小の植栽が生い茂つた空間といった土地利用を想像するのが妥当であろう。

なお、八幡宮が当地に再遷座する前の状況については、「新編常陸國誌」に次のように記されている。

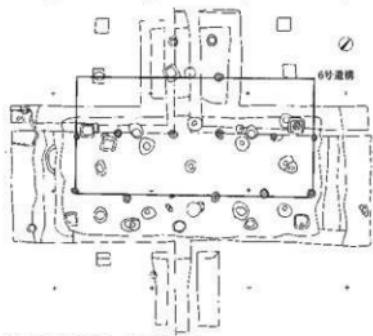
〔八幡宮〕町ノ北ニアリ、社地ハモト蓮乗寺〔法華宗ニテ、元禄元年間基〕、本行寺〔法華宗ニテ、慶長ノ初間基〕、本法寺〔法華宗ニテ慶長四年間基〕ノ境内ナリシガ、本法寺ハ天和三年、本行寺ハ貞享元年、蓮乗寺ハ宝永元年、各



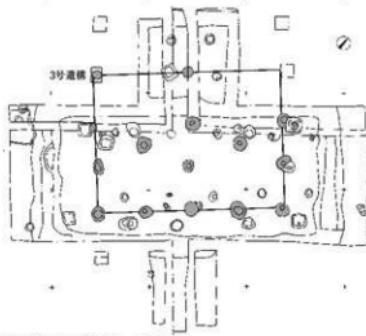
第I期 17世紀前半



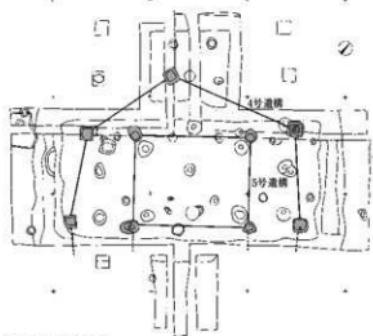
第II期 17世紀後半～1709年



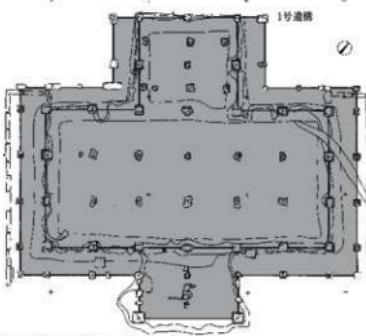
第III期 1709年～1740年頃



第IV期 1740年頃～1775年



第V期 1775年



第VI期 1775年～現代

他所二移リテ、宝永三年、那珂西村八幡宮ヲ此所ニ移シ建タリ」

すなわち本地点は八幡宮が再遷座される宝永三年以前は蓮乗寺・本法寺・本行寺の日蓮宗寺院三ヶ寺の寺院地であったということになる。さらに『新編常陸国誌』の各寺院の項目及び『日蓮宗寺院大鑑』(日蓮宗寺院大鑑編集委員会一九八二)の記述を参照し、三ヶ寺の開基年と移転年をまとめてみると、

○蓮乗寺…水禄元(一五五八)年開基、宝永元(一七〇四)年他所へ移転
○本行寺…慶長三(一五九八)年開基、元和二(一六一六)年当地に移転、
天和三(一六八三)年他所へ移転

○本法寺…慶長十四(一六〇九)年開基、天和三(一六八三)年他所へ移転となる。いずれにせよ、当地は一七世紀初頭(一八世紀初頭まで約一世紀の間)寺院地であったことは疑いない。第一期を一七世紀前半とみれば、寺院地としての土地利用の前半時期に該当するが、前述したように明確な柱穴や区画溝は認められることから、本調査区には寺院に係る建造物はなく、寺院地の庭空間としての利用がなされていたものと思われる。

(1) 第Ⅱ期—八幡宮遷座以前の時代②—

ローム層上面を確認面とし、七号遺構および一五号遺構を指標とする遺構群である(一五六)。第一期同様、八幡宮再遷座以前の、寺院地時代の遺構群と判断される。

年代を比定する資料第一期同様乏しいが、七号遺構出土資料のうち「一六一」とから(本節五参照)、ひとまず一七世紀後半(一七〇九年)としておきたい。

第一のカワラケは一七世紀前半代のカワラケより後出する様相を呈していることから、これらは第一期の植栽痕を切っていることから、第一期の庭園としての植栽を抜き取つて、何らかの建物を建てたものと考えられる。七

号遺構は布壠状で六つの柱穴を有する。南に向かって屈曲することから、南側に本体建物があり、その区画塀として設置された可能性が極めて高い。七号遺構—P4とP5の間の溝が途切れているのは通用口の痕跡であろうか。掘削の深さから、区画塀は相応に強固な構造体であったと想定される。

寺院の中のどの部分にあるのか、わずかな調査区の情報から想定すること是不可能だが、少なくともこれらの遺構群は、一七世紀後半になって日蓮宗寺院三ヶ寺のいずれかの寺院が寺院の拡張を行った結果であることはほぼ間違いないだろう。

七号遺構の規模からして、同遺構は伽藍における中核的な建物の区画施設の一つであった可能性が高い。また軸線は現行八幡宮の軸線であるN—四三度—Wとは明確に異なり、N—三三度—Eを向くことも特徴的である。

(2) 第Ⅲ期—八幡宮拝殿①期—

第三層上面(表土下約10cm)を確認面とする。包含層Ⅲ層は八幡宮が再遷座した宝永六(一七〇九)年に普請された際の整地土と推測される。このⅢ層上面において少なくとも三時期における土地利用の変遷を辿ることができ、うち最も古い時期を第Ⅲ期とした(一五六)。六号遺構を指標とする。

六号遺構は直徑約30cmの掘形を有する掘立柱建物跡であり、八幡宮の最初の拝殿と思われる(八幡宮拝殿①期)。この建物は礎を含む土で根固めを行つているものが一部に認められるが、さほど強固なものではない。規模は桁行五間(九、九m)×梁行二間(五、九m)で、一間の寸法は桁行が一、九八mを測るのに対し、梁行が二、九五mと長い。現行拝殿より一回り小さい建物が想定される。瓦の出土はなく、こけら葺きであった可能性が高い。

六号遺構の軸線は現行本殿・拝殿の軸線であるN—四一度—Wにはほぼ同じである。また桁行の中心は現行拝殿の中心軸と同一軸線上に直行しており、八幡宮

再遷座当初から現行軸線がほぼ確定していたことが窺える。

据立柱建物の耐用年数がどのくらいであったのかは不明だが、伊勢神宮の式年遷宮が二〇年周期であること等を考えると、据立柱では一四半世紀程度が限界であると考えられる。このことから、第Ⅲ期の年代は宝永六（一七〇九）年から一七四〇年頃と想定される。

（四）第Ⅳ期—八幡宮拝殿（2期）

第Ⅲ層上面で検出された、三号遣構を指標とする段階である（一五六）。三号遣構は桁行四間（七・六m）×梁行三間（五・七m）のプランを有する礎石建物跡である。検出されたのは直径約五〇cmの浅いレンズ上の掘形に礎を充填した根固めであり、本来はこの上に礎石が置かれていたものと推測される。八幡宮で確認された初めての礎石建物跡であり、六号遣構（初代拝殿）に重なっていることから、本遣構は、六号遣構の拝殿が解体・廢棄され、新たに普請された拝殿と思われる。

第Ⅳ期の年代については、第Ⅲ期拝殿と現行拝殿の間ということと、一七四〇年頃から安永四（一七七五）年に比定される。

一間の寸法は桁行・梁行ともに一・九mを測る。礎石掘形は一五基が検出されている。主軸方位はN—四三四度—Wであり、第Ⅲ期より數度軸線がずれるものの、大幅な軸線の変化はなく、ほぼ前代の軸線を踏襲している。瓦の出土はなく、こけら葺きであった可能性が高い。

六号遣構との関係については、明確な切り合いはないが、六号遣構が据立柱建物、三号遣構が礎石建物ということを考えると、建造物の一般的な変遷から前者が古く、後者が新しいと考えるのが自然であり、三号遣構を後進の建物として把握した。いずれにせよ、八幡宮再遷座以後、拝殿が二度の建て替えを経ていたことは、検出された遣構から確実であり、現行拝殿は三代目となる。

なお、前述したように「鎮守帳」「水府寺社便覧」には現行拝殿の前の拝殿は「長四間 橫二間」と記されており、かつ一棟のみの記述で、建て替えを行つたという記載はどこにもない。しかし考古学的には、Ⅲ期の拝殿は五間×二間、Ⅳ期の拝殿は四間×三間で、いずれも文献資料の規模と一致しないばかりか、再遷座から現行拝殿の普請まで二度の建て替えを行つてることが明かとなつた。そもそも「鎮守帳」「水府寺社便覧」の拝殿の記録がいつの時代のもののかは明確になつてない。同史料に併記された「長六間 橫二間半」という前殿の存在も、発掘調査から窺うことができなかつた。このよう文献資料と考古資料との間に大きな齟齬がみられるということは、「鎮守帳」「水府寺社便覧」の記述は創祠当時のものであり、再遷座時の記録ではないと判断せざるを得ないのではないか。

（五）第Ⅴ期—八幡宮拝殿（3期）

第Ⅲ層上面で検出された、四号遣構と五号遣構を指標とする段階である（一五六）。五号遣構のプランは東西一間（四・九m）南北一間（三・九m）で、東西方向（桁行か）に一m程長い長方形を呈する。いずれも柱痕が明晰に認められ、その部分が空洞となつてゐるほど保存状態は良好であった。抜き取り痕はなく、柱がそのまま腐食したものと思われる。柱の形状は断面凹形であり、一边は約一cmを測る。

五号遣構は簡易な祭壇のような建物と想定される。根拠としては、柱間が非常に長く、長期の建造物としては適さないような正方形プラン、そしてアワビの間という、仏堂や墳墓堂を彷彿とさせるような正方形プラン、そしてアワビの埋納等、宗教色彩がひときわ濃いこと、本遣構の周りを五角形に取り囲む遣構である四号遣構があること等が挙げられる。安永四（一七七五）年、第Ⅳ期の二

ために建てられた祭壇遺構と思われる。

さて、五号遺構を五角形に取り囲む四号遺構についても所見を述べる。四号遺構は一辺約五〇cmの方形プランを呈する五基のビットによって構成される。いずれも遺構底面に正位に据えたカワラケが検出され、その上に角柱を建ててそれを神木と見なし、五号遺構を取り囲むように設定して注連縄を廻らし、境界を張つて神事を執り行つたのではなかろうか。

いずれにせよ、第V期の土地利用というのは、第IV期の二代目拜殿から、第VI期の現行拜殿（三代目拜殿）に移行する際の地鎮祭のための遺構群であり、地利用と位置づけられる。

長期間の土地利用ではなく、安永四（一七七五）年頃に行われた、短期間の土地利用と位置づけられる。

（六）第V期—八幡宮拜殿（4期）

I層上面（表土層）で検出された、現行拜殿及び弊殿である（一五六）。時期は安永四（一七七五）年から現代。二三〇余年の長きにわたり拜殿及び弊殿としてこの地に鎮座してきた。

現行拜殿の建築にあたっては、III層面から一〇cm程度盛土し、周囲より一段高い壇を築いたことが断面観察から窺えた。盛土層（包含層I・II層）は固く擣き固めらる部分もあるが、それほど強固ではない。実は現行拜殿を支えるための重要な事業は盛土ではなく、基壇の周囲（＝拜殿及び弊殿の外側の基礎石列の直下）に廻らされた、幅一二〇cm、深一五〇cmに及ぶ布掘地形にある。ここではU字状の掘形に砾が充填された、極めて強固な地形であることが確かめられた。

さて現行拜殿は安永四（一七七五）年以降、建て替え等が行われた形跡はなく、建築意匠からも一八世紀後半の様式を留めているとの建築学的所見もある。だが経年による傷み等が生じたのであろうか、文献資料には度重なる補修の記録が残っている。後世補修痕は今回の修復工事でも確認されたようであるが、考古学的にも、「撒錢」という興味深い形で確認されている。

第三節で述べたように、I層上面からは近世～近現代に係る錢貨が四〇〇点以上検出され、多くは撒錢として理解される。近世の錢貨と近代の錢貨が混在していることから、近世～近代にかかる度重なる修理の過程で、複数回の撒錢が行われたと想えられ、度重なる補修、しかも床板を外すような大規模な補修が行われたことを裏付けるものと言えよう。

（七）小結

今次調査では拜殿直下の調査という性格上、文献資料にみられる前身拜殿の所見を得ることを一つの目的としていた。発掘調査の結果、果たして現行拜殿以前に二時期の拜殿があり、現行拜殿は三代目であることが判明し、初期の目的を達成することができたが、さらに八幡宮再遷座以前の土地利用について、一七世紀前半という古い段階から、変遷を推測することができたのは望外の成果であった。表土掘削をせず、現行拜殿の床下の塙を払つたところが第一遺構確認面となつたり、二世紀も前の柱が空洞化して残つてたりと、非常に保存状態が良好であったことが、僅かな調査面積から予想以上の大きな果実を得ることができた最大の要因であった。

また、本項で設定できた六期変遷は、八幡宮拜殿の来歴のみならず、八幡宮の全史を構成する上でも有益な所見と思われる。さらには、八幡宮以前の近世の土地利用や、後述するカワラケ編年案など、近世水戸の歴史を窺う基礎資料を提供できる可能性がある。水戸の地域史の充実において、今次調査で得ら

れた成果の意義は少なくないものと思われる。

四 水戸八幡宮のまじない—地鎮と撒錢—

本項では今次調査で検出された理納遺構について考察を行う。今次調査は言うまでもなく近世寺社の調査であり、しかも神職が神事を執り行う場としては、本殿より拝殿のほうが頻度が高い。したがって発掘着手前から、水戸八幡宮のまじないの痕跡を確認するというのが目的の一つとして挙げられていた。

そして結果として、今次調査では二つの注目すべき、まじないの遺構が認められた。その一つが地鎮であり、もう一つが撒錢である。以下その所見を述べていこう。

(一) 地鎮

地鎮遺構とは、地鎮とは建築に先立つて行われる、土地を鎮めるための宗教儀礼のこと。考古学的には古代から現代までさまざまな形で検出されている。その多くは寺院等、仏教関係の事例であり、神道に関する地鎮の事例は驚くほど少ない。事例としては東京都千代田区溜池遺跡で山王社家による祈禱關係簡が出土している例や（関口二〇〇四）、静岡県伊東市指定文化財の八幡宮来宮神社の本殿基壇中央から、紙状の有機物にくるまれた寛永通宝・鉄釘、円礫の三点が検出された例（金子一九九九）などを挙げることができる。

水戸八幡宮の地鎮遺構 さて、今次調査による地鎮遺構とは、第V期（一七七五年）に比定される四号遺構、すなわち五基のカワラケ埋納ビットと、四号・五号遺構の一部にみられるアワビ埋納の痕跡である。

カワラケ埋納ビット 五号遺構の柱は腐っていたが、柱痕がそのまま空洞化するほど良好な遺存状態である。検出されたカワラケはいずれもビットの底面に

正位で置かれていたが（一五七）、埋納物等はすでになかった。カワラケは全てのビットで一枚のみであり、墨書きは認められない。ビットが五基ということから、顯密による地鎮・鎮壇儀礼あるいは陰陽道による土公供の修法で使用される二十種物（五宝・五葉・五穀・五葉）や五色の玉や砂等が埋納されたことを疑い、注意深く調査したもの、そのような理納物を窺わせるものはなかった。恐らく穀物等の供物が供えられていたのではないかろうか。

前項で述べたように、四号遺構は祭壇、五号遺構は祭壇を取り巻く結界施設と想定している。その目的は三代目の拝殿（現行拝殿）を普請する際の地鎮・鎮壇の儀式である。そして地鎮・鎮壇の神事が無事執り行われた後、抜き取り痕がないことから柱を切り、柱穴上面にアワビを載せ、礎石を据え、一〇cm程度の盛土をして基壇となしたという工程が復原できる。

アワビ埋納 今次調査のもう一つの地鎮の痕跡と言えるのが、ビットの最上層で検出された二つのアワビである。アワビは殻長一四・五cmのクロアワビで、

四号遺構と五号遺構それぞれ一基のビット上層に添えられていた（一五八）。



157 カワラケ検出状況



158 アワビ検出状況

供物として使用したもの、最後に柱穴跡に供えたものと思われる。

アワビは古来より神事の供物として用いられ、貝類の中でもハレの場に深い関係がある。民俗例は数多く、県内の神事でアワビとの関連性を窺わせる代表例は、東西金砂神社（常陸太田市・日立市）で行われる大祭礼がある。七三年ごとに行われる浜降り神事として有名な祭礼であるが、ここでは壺に入れたアワビを御神体としている（茨城県教育委員会一九七七）。

しかしアワビと埋納の関係を窺わせる発掘例は意外なほど少ない。管見では神戸市兵庫津遺跡で遺構に伴わず、生活面に意図的に埋えられた形で検出されている例が挙げられる。報文では地鎮や祭礼などに使用された可能性を疑つてゐるが、根拠が少なく可能性を言及するに止まっている（神戸市教育委員会二〇一二）。

(II) 撒銭

撒銭とは、撒銭とはその名が示す通り、錢を撒く行為である。現在では上様式などで撒銭が行われることが多い。発掘例では、豊島区東鶴道跡山田ビル地区（橋口二〇〇一）や板橋区板橋山之上遺跡（関口二〇〇四）で撒銭が認められている。撒銭の痕跡を記録するには錢の全点ドット上げが必須となる。今調査では第一層上面で多量の錢貨が散らばっていることが確認され、撒銭である可能性が極めて高かつたため、当初より全点ドットによる分布図の作成を行った。

水戸八幡宮の撒銭 今調査で検出された撒銭は四一九点を数える。うち中世錢が二枚、近世錢が九三點、近代錢が八三點、現代錢が二四一点である。この内訳が示すのは、撒銭が一回限りのものではなく、複数回にわたり施行されたことを証明している。

分布状況 一六〇は撒銭の分布図（ドット図）である。中近世錢を●印で、

近現代錢を○印で表現した。なお洋服には乗銭箱が置かれており（D3区）、



159 撒銭検出状況（竹串部分が錢貨）

そこから漏れた錢貨も含まれる。D3区で錢貨が著しく集中している集中しているのはかかる事情に由来し、大半が現代銀である。

分布図（二六〇）から分布状況を読み取つてみよう。D3区以外は著しく集中する工

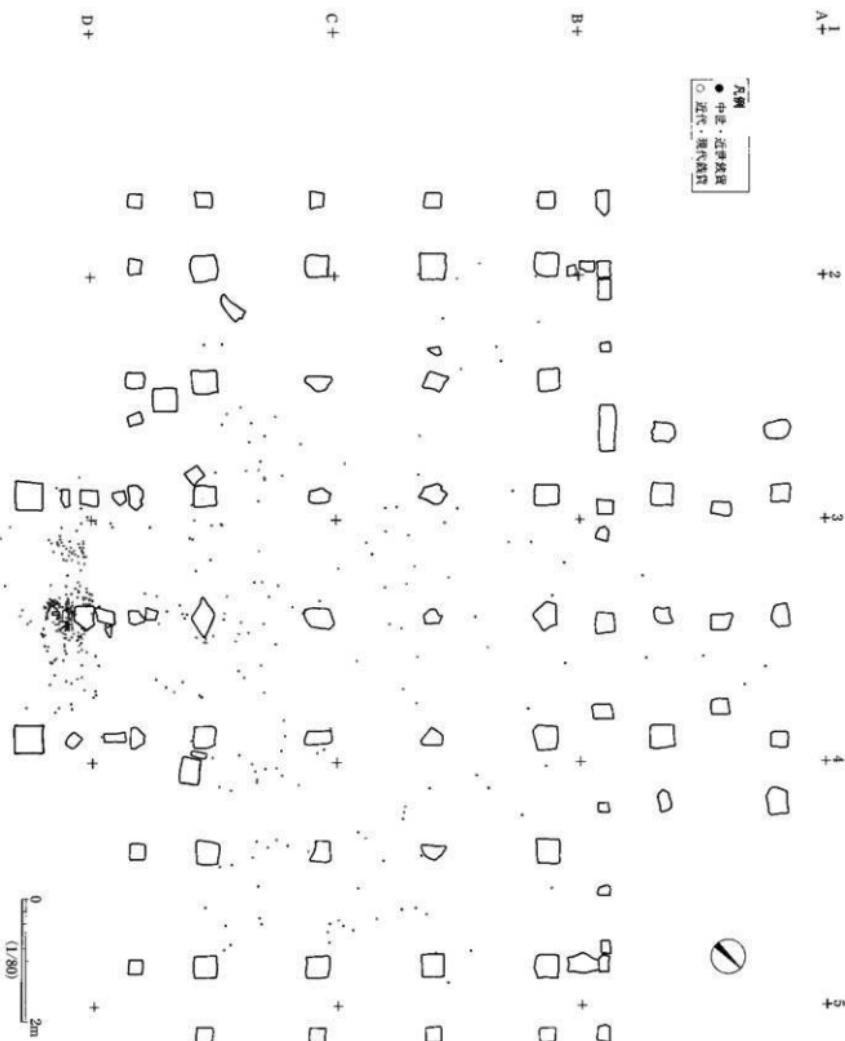
リアはない。だがCライン以南に比較的多く分布しており、東西方向ではやや東寄りに分布している傾向が認められる。これは中近世錢も近現代錢も同様である。ここから撒銭の状況が復原できる。すなわち神官は拝殿の中央付近、B3区付近に立つて、南側に相対する参列者に向かって錢を撒いたものと思われるのである。

年代・回数等 撒銭が施行された実年代は不明だが、I層上面であることから安永四（一七七五）年以降は間違いない。二で述べたように現行拝殿竣工以降も、近世へ近

代にかけて數度の改修工事が行われており、今回検出された撒銭はかかる改修工事に伴うものと理解される。床板を外さなければ撒銭が一六〇のように分布することはないと想定される。床板を外す程度の改修工事が行われたことを物語つている。撒銭の回数は不明であるが、近世錢と近代錢に大別されることから、近世と近代に最も回数が多いことは間違いないだろう。

なお近世錢には一文錢のほか四文錢も相当量認められた。錢種に偏差はみられない。

分布図（二六〇）である。中近世錢を●印で、



(三) 小結

近世の埋納遺構は江戸遺跡を中心に着々と類例を増やしつつあるが、本項目頭で述べたように、近世神社における埋納遺構の調査例は意外なほど少ない。そもそも社殿の下を本格的に発掘調査する機会は全国的にみても少なく、その意味では今次調査成果は大変貴重な機会であったと言える。

カワラケとアビを埋納した四号・五号遺構については、近世神社の地鎮・鎮壇のありようを窺わせる好例といえる。カワラケ埋納ピット自体は珍しいものではなく、むしろ埋納遺構の典型ともいえるが、それが祭壇（四号遺構）の周囲を五角形に廻るというのは、管見の限り類例がない。また安永四（一七七五）年という曆年代をピンポイントで比定できる意義も大きい。

撒錢についても、今次調査ほど明確な形で、しかも複数回にわたる撒錢の催行を窺える類例は他になく、極めて恵まれた調査環境であったと言える。数多くの遺物が出土する江戸遺跡では、全点ドット上げによる調査法をとる機会は少ないため、埋納遺構の報告例の増加に比べ撒錢の報告例は極めて低調と言つてよい。かかる状況下で四〇〇点以上の銭貨を図示できたことは、埋納遺構の調査をめぐる偏差の解消に向けて相応の意義を有するものと思われる。

五 カワラケ編年

(二) 各期の様相

さて第三節で述べたように、今次調査ではカワラケが二三三点（破片一二五点・個体一八点）が出土している。出土遺物総数の一五%と高い出土率であり、口縁部にススが付着しているものが極めて少なく、社殿直下での出土といふことを考へると、大半が祭礼に使用した祭具の一部と考えてよいものと思われる。さらに注目すべき点として、カワラケの出土地点（層位・遺構・包含層）を根拠として、前述したI～VI期区分のそれぞれの画期に比定でき、なおかつ図示

に耐えうるカワラケを一二点抽出できることがある。資料数は必ずしも多くはないが、編年案を示すことができる環境に恵まれたわけである。僅かな資料であり、また祭具としての特殊な性格であることから、編年案がどこまで普遍化できるかどうかは心許ないが、これまで茨城県下において近世カワラケの編年が組み立てられたことはないことから、ここに水戸八幡宮のカワラケ編年案を示し（六一）、大方の意見を窺うこととした。

(一) 概要

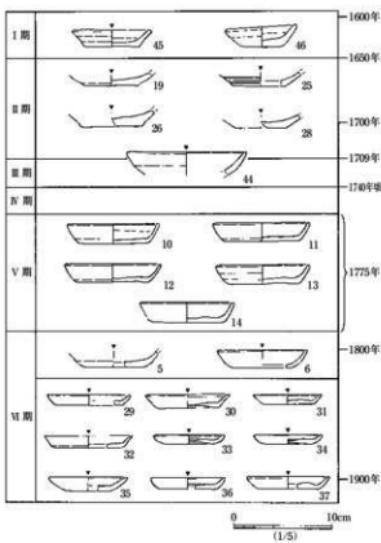
抽出したカワラケは二二点である。うち器形全体が復元できる資料は一七点であった。しかし底部のみで口縁部が復元できないもの、口縁部のみで底部が復元できないものについても、出土層位等から年代が比定できるものについては抽出することにした。このような類の資料は基準資料として必ずしも適当ではないかもしれないが、編年案組立のための参考資料としては十分である。

遺物の出土地点はローム層上面一括、同層上面の遺構、包含層III層、III層上面の遺構、I層上面の遺構、I層上面一括であり、出土地点によってさきに設定したI期からVI期の土地利用変遷にそれぞれ當てはめたものが一六一である。なお陶磁器類の共伴による実年代のクロスチェックはできず、あくまでも出土地点による年代区分であることは留意されたい。

八幡宮一期 四五・四六を基準資料とする。年代は一七世紀前半に比定される。

口径七、六cm・六、八cmを測る、いわゆる小カワラケである。いずれも赤色粒子を多く含む。四五は薄手で外反気味に立ち上がるのに対し、四六は厚手で直線的な立ち上がりである。

これらの遺物群の比定に際しては、田口勝子氏によつて提示された、県央地



161 カワラケ編年案

域における中世カワラケの編年・分類案が参考になる（田口二〇一）。まず器形分類をみると、四五・四六は田口F類（口径九cm未満の小型カワラケで、口径に対する高さが低い）に該当する。具体的には薄手の四五は小崎城跡第一号堀出土の基準資料に、厚手の四六は村松白根遺跡第八三号建物跡出土の基準資料にそれぞれ類似している。これらの基準資料はいずれも田口V期、すなわち一六世紀末～一七世紀前半である。八幡宮I期は一七世紀前半と想定されており、年代的に矛盾はない。

八幡宮I期のカワラケは中世カワラケの系譜を引く資料である。

八幡宮II期～V期の指標遺構である七号遺構から出土した一九に共通した様相を持つ遺物群をまとめた。一九・二五・二六・二八を指標とする。年代は一七世紀後半～一七〇九年に比定される。

いずれも底部のみで全体の器形は不明。雲母や白色粒子など混入物が多く、胎土が粗めなのが共通している。また底部と体部の間にわずかなくびれが見ら

れ、年代的には八幡宮I期は一七世紀前半と想定される。八幡宮II期～V期は一九世紀前半～一九〇九年頃～一九五五年に比定される。

八幡宮VI期～VIII期は、八幡宮II期～V期の指標となる。年代は一九世紀後半～一九〇九年頃～一九五五年に比定される。

八幡宮V期 四四を指標とする。包含層III層からの一括遺物であることから、年代は八幡宮が再遷座された宝永六（一七〇九）年にはほぼ比定できる。口縁部のみで全体の器形は不明。雲母等の混入物は比較的多い。

八幡宮VI期～VIII期は、八幡宮II期～V期の指標となり得るかどうかは今後検証していく必要がある。

これらも共通点である。内面調整は二五・二八は底面をヨコナデし比較的丁寧であるが、一九・二六は渦巻状の調整痕をそのまま残している。

ただし二五については体部に沈線を廻らし、他に比べ薄手であり、やや異なる様相を見せており、八幡宮II期の指標となり得るかどうかは今後検証していく必要がある。

八幡宮V期 四四を指標とする。包含層III層からの一括遺物であることから、年代は八幡宮が再遷座された宝永六（一七〇九）年にはほぼ比定できる。口縁部のみで全体の器形は不明。雲母等の混入物は比較的多い。

八幡宮VI期～VIII期 该当する遺物はなかった。IV期は一七四〇年頃～一七五五年に比定される。

八幡宮V期 四号遺構の埋納カワラケ五枚（一〇一四）を基準資料とする。年代は現行拌設が建てられた安永四（一七七五）年にはほぼ比定できる。混入物は少なく、胎土の緻密な精製カワラケである。前代のカワラケに比べ口径に対する底径の比率が高くなり、その分口縁部の立ち上がりの角度がきつめになっている。内面調整は綺麗にナデ調整が施され、ここに至って、中世以来のカワラケの系譜（調整技法等や器形の傾向）はほぼ失われ、規格化されたカワラケに変化する。

八幡宮VI期 一号遺構布掘地形出土の五・六と、I層上面出土の一九～三七を基準資料とする。前者と後者は器形が異なり、前者を古式、後者を新式として細分することができる。年代は前者が一七七五年～一九世紀、後者を近代と理解しておきたい。

五は混入物が多い粗めの胎土であり、ややII期の遺物群に近い印象も受けけるが、底部と体部の間にくびれではなく、丸く立ち上がる。六は薄手の丁寧にナデ調整が施された精製カワラケであり、V期に認められる規格性はさらに濃くなっている。

二九〇三〇はカワラケが更に小型化し、しかも器高が著しく低くなるのが特徴的である。いずれも混入物は少なく、よくナマ調整された精製カワラケである。ここでも規格性は著しい。

(三) 小結

以上、一七世紀前半より近代に至るカワラケの変遷を辿ってみたが、繰り返すように共伴遺物によるクロスチェックがなされていないため、編年案としてはやや根拠が薄い点は否めない。しかし県央地区のカワラケについて、中世より近世初頭は田口勝子氏によって頼るべき分類・編年が示されているので(田口二〇一)、それにつながる編年案をここに提示できたことにより、田口編年と八幡宮編年を組み合わせ、一五世紀前葉から近代に至る約六世紀の編年をひとまず組み立てる事ができた。今後はこれを叩き台として、編年の充実を図つていく必要がある。

六 おわりに—課題と展望—

本節では水戸八幡宮の考古学的考察として、土地利用の変遷、まじない、カワラケ編年の三つの論点を取り上げ、それぞれ分析を試みてきた。このうち土地利用の変遷については、水戸八幡宮の再遷座から拜殿が三度の建て替えを経ていること等、文献史学を主体とする八幡宮史に再考を促す調査成果を提示できたのは第一の成果と言えるだろう。

また、神社における埋納事例や、撒錢の事例が全国的に稀少な状況下で、ある程度具体的にまじない様相を提示できたことも幸いであった。

更に県内初の試みとして提示した近世カワラケ編年案については、神社の埋納物としての特殊性を考慮する必要があるものの、今後の編年研究の充実に向

け、一定の資料提供はできたものと思っている。

調査面積一七三畠と、さほど広さではない今回調査において、上記のようないくつかの論点を深めることができたのは、三面調査という、水戸市域においては異例の面的調査が可能であったことによる。江戸道路に比して土地利用の頻度が少なく、また土地利用の変化にあたり盛土を重ねる必要的ない水戸市域の近世遺跡では、ローム層上面での一面調査が大半であり、複数の造構確認面を見出すことは困難なのである。

さて今次調査成果を踏まえた上で、今後の課題としては、まず第一に文献資料と考古資料との不整合を解消する必要があろう。今回の修復工事は解体を伴わないので、社殿に使用されている木材に記されているであろう墨書き資料(紀年銘資料)を確認することができなかつたが、将来新たな紀年銘資料が発見されれば、この不整合は自然と解消していく可能性が高い。

さらにもう一点課題として挙げられるのは、本殿の発掘調査(第一次調査、井上一九九九)との対比である。第一次調査で確認された本殿は一時期のみの土地利用であり、さらに「岩石にも等しいくらい堅固な地盤」とまで表現されるほどの地形がなされている。かかる本殿の土地利用と地形のあり方と、拜殿及び弊殿のそれとはかなりの偏差が認められ、その意味するところについても、検証が必要であろう。この点は発掘調査例の増加を待たざるを得ない。

いずれにせよ、本殿の発掘調査と拜殿及び弊殿の発掘調査という二度の発掘調査により、水戸を代表する文化遺産の一つである水戸八幡宮の来歴に実証的根拠を提示できたことは大きな成果であることは間違いない。学際的研究的重要性という、半ば定型化した文言ではあるが、特に水戸八幡宮に関しては、文献史学・建築史学・考古学の三分野による相互検討を行える環境が揃いつづる。八幡宮史の異なる正確な叙述と、八幡宮史を通じた水戸の地域史の充足に向け、今後も問題意識を持つて総合的に検討していくことが肝要であろう。

引用・参考文献

阿部常樹 二〇〇六 「貝類遺体のサイズに関する計測方法」『東京大学本郷構内内地跡工学部一四号館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室
井上義安 一九九九 「遺構確認調査」『重要文化財八幡宮本殿保存修理工事報告書』 八幡宮

茨城県教育委員会編 一九七七 『茨城芸能史』 茨城文化団体連合
金子浩之 一九九九 「地下調査」『伊東市指定有形文化財八幡宮来宮神社社殿修理工事報告書』 八幡宮来宮神社・伊東市八幡野区

神戸市教育委員会編 二〇一一 「兵庫津遺跡第五二次発掘調査報告書」 関口慶久 二〇〇四 「江戸の地鎮と埋納」『江戸の折り』 吉川弘文館

田口曉子 二〇一一 「県央・県北のかわらけ」『茨城中世考古学の最前線』 茨城県考古学協会

日蓮宗寺院大藏編集委員会編 一九八一 「日蓮宗寺院大藏」 池上本門寺 橋口定志 二〇〇一 「信仰と祭祀」『因説江戸考古学研究事典』 柏書房
福士祐一 一九九九 「神社の創設と沿革」『重要文化財八幡宮本殿保存修理工事報告書』 八幡宮

水戸市教育委員会編 二〇〇六 「吉田古墳」(水戸市埋文調査報告第六集) 水戸市教育委員会編 二〇一一 「平成二〇年度水戸市内遺跡発掘調査報告書」
(水戸市埋文調査報告第四三集)

発掘調査報告書抄録

ふりがな	みとじしてゆうけいぶんかざい はちまんぐうはいんでんおよひへんほせんしゅうこうじょうこうじょ							
書名	水戸市指定有形文化財 八幡宮拝殿及び幣殿保存修理工事報告書							
編著者名	畑野経夫、岡口慶久							
編集機関	宗教法人 八幡宮							
発行機関	宗教法人 八幡宮							
所在地	茨城県水戸市八幡町8-54 ☎ 029-221-5327							
発行年月日	2011(平成23)年10月14日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いばらきけんみとし 茨城県水戸市 はちまんぐう 八幡町8-54	8201	62	36° 23° 16°	140° 27° 36°	2009.8.26 ~ 2009.10.14	173m ²	社殿保存修理工事(基礎工事)に伴う 発掘調査	
いばらきけんとうがく こういせき 茨城高等学校 遺跡 じいちらてんとうがく さんじょうきょう 第1地点・第 3次調査	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	包蔵地	縄文	なし	縄文土器(早期・前期)		八幡宮拝殿直下において、近世初頭から現在に至るまでの間にわたる土地利用が明らかになった。さらに地鎮や撒錢等、祭祀行為の痕跡が検出された。		
	包蔵地	奈良・平安	なし	土師器・須恵器				
	寺院 神社	近世	掘立柱建物跡、礎石建物跡、地鎮造形、祭壇、撒錢、陶画、構造痕、土坑、ピット	磁器・陶器・土器・銭貨・金属製品・貝類遺体				
	近~現代	拝殿(基壇・礎石・布掘地形)、撒錢	磁器・陶器・土器・銭貨・金属製品・硝子製品					

※北緯・東経は国地系2000(世界国地系)対応